國語 卷八

改訂版

3759
Iw1
資料室

41979
教科書文庫
4
810
41-1937
200030
2222

資料室
3759
Iw 1

昭和十二年十二月二十一日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

岩波編輯部編

國語

改訂版

岩波書店刊

廣島大學圖書之印

広島大学
教
37750
図書

國語　卷八　目次

一　都市美論……佐藤功一……一
二　巴里通信……島崎藤村……一五
三　城……和辻哲郎……三〇
四　東洋の詩境……夏目漱石……四一
五　生活の藝術……大須賀乙字……五四
六　奥の細道……松尾芭蕉……六〇
七　陽炎……松尾芭蕉……七四

八　能樂の特質……戸川秋骨……七六
九　鉢の木……（觀世流正本）……八四
一〇　長柄堤の訣別……坪内逍遙……一〇七
一一　人臣の道……北畠親房……一一九
一二　哲人の養成……安倍能成……一三五
一三　淨火……ケルン阿部次郎譯……一三三
一四　人間ゲーテ……茅野蕭々……一四四
一五　言靈……井上毅……一四九
一六　大和民族の固有性……五十嵐力……一五六
一七　彫刻と自然……ロダン高村光太郎譯……一六二

一八　茶の宗匠……岡倉覺三……一六八
一九　龍安寺の庭……荻原井泉水……一七四
二〇　手首の問題……吉村冬彦……一八〇

廣島大學圖書之印

佐藤功一
建築家
工學博士
早稲田大學教授
栃木縣の人
明治十一年生

國語　卷八

一　都市美論

佐藤功一

海外に遊んだ人の多くは、其處の古都市の美を口にするが、新しい市街の美を說く人は少い。同じ傾向から、國內に於てもまた、人は第一に奈良・京都の美を擧げる。私は此の事に就いて決して異議を挾むものではない。しかしながら、是等の古都市が旅行者の情操を動かすところの動因は、主として歷史的回想であつて、一般施設の合理性や、線の變化や、立體の集合やから來る直觀の美ではない。卽ち、古都の美は一般都市

コンスタンチノープル
現イスタンブール
ヨーロッパトルコの都市
エヂンバラ
スコットランドの首都
シティー・クラウン
都市の冠頂をなす部分
カセドラル・タウン
宗教都市
ニーデルランド
オランダ及びベルギーの低地地方の稱

美を論ずるに當つては、特殊の範疇に屬するものである事を心にとめておかねばならぬ。

壯觀を呈する都市は、平原から段々と高く盛り上つた都市で、コンスタンチノープルやエヂンバラなどがこれに屬する。しかし、斯ういふ都市は世界に於て極めて少く、且近代都市としては總べての點に於て不便多く、其の發達は困難である。私はこゝには主として平原都市を擧げることとする。

多くの封建時代の都市は、發生上、所謂シティー・クラウンとして、中央に高く群を拔いて立つ宮城を核心に、其の周圍に群る聚落から成立つてゐる。歐洲の古いカセドラル・タウンに於ては、其の中央クラウンは大寺院がこれを形造つてゐる。最も早く發達した北歐の商業都市ニーデルランド地方の都

シヴィック・センター
都心
丸の内
東京市麹町區丸の内

市には、其の核心として市廳が高く聳えてゐる。これは中世紀の都市の獨立と殷富とを反映するもので、其の市廳に附屬して鐘塔を建立することは、憲法に依つて與へられた重要なる市民の特權であつた。

是等の市廳は、都市の中央廣場に面して立ち、廣場の周圍には、取引所・銀行・商業會議所・各商業組合の建物が竝び、廣場は市場として用ゐられ、所謂シヴィック・センターを形造るものであつた。東京の丸の内附近を人はシヴィック・センターといふが、東京にシヴィック・センターはないといつてよい。宮城の周圍に諸官廳が立ち

丸の内行幸道路

馬場先門
丸の内の西、宮城前廣場の入口附近
舊江戸城東南の城門馬場先門の在つた地
二重橋
宮城正門前の内壕に架せられた橋
本丸の櫓
富士見櫓
宮城内、舊江戸城本丸の東南隅に在る
中之島公園
大阪市北區中之島の東端に在る
北濱
同市東區北濱
難波橋
北濱から中之島を横斷して架せられた橋

竝んではゐるが、それは帝都としての中樞區域であつて、東京市民のシヴィック-センターではない。しかしながら、平原都市東京の偉觀は此處に集中せられてゐる。殊に馬場先門からの宮城の眺、左に二重橋、右に本丸の櫓を望んで、其の間に連なつた森の茂みの上に碧瓦の隱見する景觀の美は、誰しも口にする所である。

宮城本丸の櫓

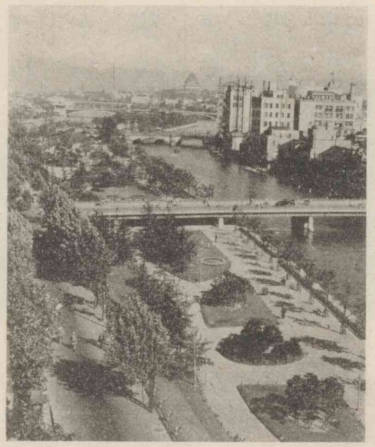
大阪市の中心は中之島公園である。北濱から難波橋を渡りながら見る左右の眺は、またなく美しいものである。左手の廣場の水に近く、コンクリートを以て平たく固めた築堤の上をば、曳舟の綱を肩にした船頭が通り、それと生垣を隔て

公會堂
大阪市中央公會堂
圖書館
大阪府立圖書館
スカイライン
界空線

た低い樹木の向うの砂地の清らかな運動場には、兒童が遊戯に餘念がない。此處は洪水の折には水に漬かつても差支ないやうに設計されて居り、綠の木立を通して、一段高まつた所には、赤煉瓦の公會堂、其の背後には白い圖書館が立ち、高くスカイラインを破つて抽きんでた市廳舍の塔が聳えてゐる。是等は悉く人工を以て作り上げられた線の變化と立體の集合から成る美である。また橋の右手に低く突き出た島の先端にも捨て難い趣があり、難波橋もまた相應に意匠を凝らされたもの

難波橋より西方を望む

である。建築的ディテールに就いては多少の申分もあるが、これこそ眞に都市の美觀であることを何人にも頷かしめる。朝の靄によく、晝の光によく、夜の燈によい。洵に世界に於ける都市の美觀の一つである。


淀屋橋より東方を望む

私は此の全體のプランを立てた技術家の手腕に敬服するものである。其處には何等の歴史的回想もなく、何等の傳說をも容れずに、自由に計畫が表現されてゐる。また、河や地勢を利用してはゐるが、自然の姿其の儘から來る美と、これに伴なふ聯想を主としてゐるのではない。

都市の眞の美は、その隅々まで、總べて、人間の知識と人間の意志とによつて、有機的に作り上げられたものでなければならぬ。勿論、公園や逍遙道や一般住宅地は、寧ろ天然物を多く取り入れて不定形に作ることを妨げない。且其の方が、定形的に作られたる商業街と對比して、反映の美をなすものである。商業地の街衢に街路樹などの天然物をあしらふのは、餘りに引締められた建築觀を柔らげる爲に、點景として添へられるに過ぎないものであつて、私は寧ろ或街衢には、何等の天然物をも入れることなく、幾何學的堆體の集團のみに依つて美をなさしめる部分の存在することを希望するものである。

古代の都市に於ては、市民は主要建築を以て圍まれた中心廣場に出て、神殿に詣で、ニュースを交換し、其の日の事務を處

エクセドラ　古代ギリシヤ・ローマの公共休息場

フォーラム　古代ローマの公共集會場

文藝復興　十四世紀中葉から十六世紀末葉に至るヨーロッパに於ける文化運動

ピヤッツァ　公共廣場

ヴェニス　イタリヤ北部の港市

ブリュッセル　ベルギーの首府

理し、取引を濟まし、市政演說を聞き、各種の競技をなし、入浴に身心の疲勞を一掃して、エクセドラに腰をおろして、街巷を眺め、名士の立像や美しい記念柱などの間を逍遙するなど、其の日〳〵の全體を其處で送るといふやうに、所謂フォーラム生活を送つたものである。中世紀から文藝復興期の商業都市に於ては、フォーラムはピヤッツァや市場（マーケット）に代つた。そして、それ等の周圍がどんなに美しい建物で取圍まれてゐたかは、ヴェニスのピヤッツァやブリュッセルの市場が、今もなほ昔を物語つて

ヴェニスのピヤッツァ

ゐる。現今に於ても、地方の小都市は此のプランの下に置かれてゐるが、大都市に於ては、其の活動の複雜な事が到底それを許さなくなつて來た。

中心地の廣場に必要なものは水である。湛へられた清冽な水ほど人の心を澄ませるものはない。滑かに動いてゐる水ほど人の心を柔らげるものはない。勢鋭く噴出する水ほど人の心に潑剌たる快感を起させるものはない。霧となつて飛散する水沫ほど人の心を輕くするものはない。跳噴の餘勢、散じては霧に虹を宿し、珠と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤緣を嘗めて第二の水盤に注ぐ。此の魔術的光景は、如何に幾何學的諧調を主とした是等の廣場にふさはしいものであらうか。噴泉の美は、これを木立の

間に眺めるよりも、甃や鋪石にたゝまれた大地に於て、石や煉瓦の建物を背景として觀るによい。世界に名ある噴泉の多くは洵に斯くの如き位置にあり、世界に名ある廣場は殆ど斯くの如き噴泉を有してゐる。倫敦から巴里に移つて、其の噴泉の美觀に驚く人は、更に羅馬に遊んで其の驚を深くするであらう。日本の都市にはもつと廣場が欲しいと同時に、もつと豐に水を出す噴泉が欲しい。

更に私をして一般都市としての理想をいはしむれば、電車は總べて架空線を廢して地下線式に改める。若しそれが不可能ならば、或種のものを地下電車に改めて、他をば自動車を以て代らしめる。若し街路を走る自動車の總べてを、不愉快な音響を發せぬ電氣自動車にすることが出來れば、これに過

ぎるものはない。更に斯く整理せられたる路面を、アスファルトを以て鋪裝し、夜間交通の少い時刻にこれを水洗し、晴天には鏡の如く人馬の影を垂直に路面に投映することが出來たならばどんなに美しいことであらう。整理と清淨とは都市美觀の重要な要素である。

以上は概して純建築的の美觀を主とした地區について述べたのであるが、これと相竝んで自然の風致を豐に與へた住宅地・公園・逍遙道・河畔等の對立があつて、大都市の眞の面目が保たれるであらう。住宅地は、商工業地域が平坦なるを要すると違つて、寧ろ多少の坂路を有する方が趣がある。そして、其の街路に接した樹木や芝生や花壇やに意を用ゐることを要する。そして又、或種の大公園の間には、竝木の見事な逍遙

大道の設けられる必要がある。　河川の岸には、所々に當然荷上げ場が設けられるであらうが、其の間々には是等の混雜を隱すべき美しい河畔園が作られねばならぬ。

純建築美を主とせる地域と、自然の風趣を主とせる地域と相伴なつて、大都市にはなほ他方に蒸氣が盛に立ちのぼり、大起重機が空高く動き、鐵槌の音が力強く響いて、熱火の赤く窓に映ずる工場地の偉觀があるべきである。　工場建築の美化は近頃頻りに唱へられ、且實現せられつゝあるが、工場建築のみならず、更に地上工作物一切の美化が行はれねばならぬ。都市全般の美化、これは實に現代的精神の強い顯れである。それには如何なる部分と雖も、寸毫の不整頓、不合理、若しくは不快なる形態、不調和なる色彩をなからしめ、都市全體をして

一つの美術的建築物たらしめることを要する。

近代都市計畫の本場であつた戰前の獨逸の諸都市は、極めて美觀を重要視してゐた。　其等の諸都市は、公共藝術や街衢の壯麗を、恰も產業の資本の如くに見、市の美觀を增すことは市の發展上缺くべからざる事としてゐたと云つてもよかつた。　市民は演奏場・劇場・花園・美術館・博物館等に對する支出に不贊成を唱へぬのみならず、街路を飾り、銅像を建て、噴泉・時計塔等を增設することに進んで協力した。　橋梁・停車場、其の他の公共建築物は、如何に小さなるものと雖も、悉く甚大の注意を以て意匠せられた美術的產物であつた。　そして彼等は、斯くすることに依つて其の人口が增殖し、商業が發展すると深く信じてゐた。　事實、これによつて健全なる移住者を增し、又

観光客を引きつけた。又、斯くの如くにして都市は益〻發展し、産業は益〻盛になり、地價は上騰し、市の收入は增加し、市民の稅率は低下した。　市中は整頓し、高尙な娛樂機關が備つたために、それが觀光客を歡ばしめたのみならず、市民に對して慰安を與へ、又其の敎化に役立つた。獨逸の勞働者の功程が一段抽きんでてゐた原因の一つは、此の慰安の機關と精神的娛樂の完備に基づいてゐたといはれる。

都市の美觀が、市民の慰安の上にも、健康の上にも、精神的向上の上にも、隨つて風紀の上にも、經濟の上にも、いかに重要なるものであるかは、多く言を費す必要はないであらう。

二　巴里通信

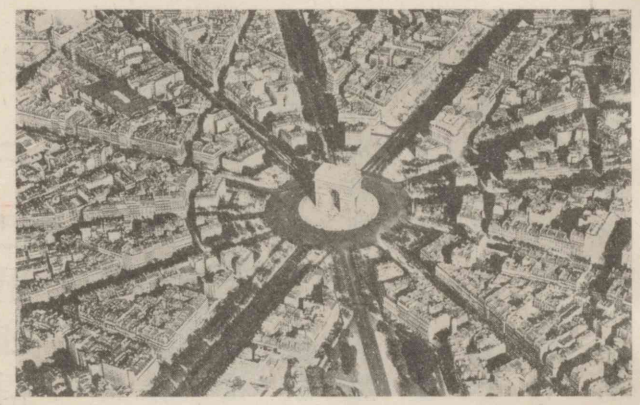
島崎藤村

島崎藤村
名は春樹
詩人　小說家
長野縣の人
明治五年生

「都市としての面積から言へば東京の半ばにも及ぶまい」とは、當地へ參らない前から友人の話で聞いては居りましたが、そのかはり立體的に積み重ねられた高層な建物には、一家屋にして優に數十の家族を住まはせ、人口に於て三百萬を數へる此の都が、佛蘭西の諺に言ふ「一日で顯出した巴里でない」ことは申し上げるまでもございません。　けれども、幾多の設計を承け繼ぎ承け繼ぎして建設せられた、その整頓した街路や、建物や、街竝木や、公園や、橋梁や、其の他の工事の跡を考へてみますと、ある一つの意志に依つて成つたかと思はれるほど、町全體として大きな建築物のやうな趣を見せて居ります。　か

エトワール　エトワール廣場
パリ市の西部に在る圓形の廣場
凱旋門　エトワール凱旋門
世界最大の凱旋門
セイヌ河　フランス北部を流れパリ市を貫ぬく河

ういふ點から申せば、巴里は確に一つの傑作と存じます。



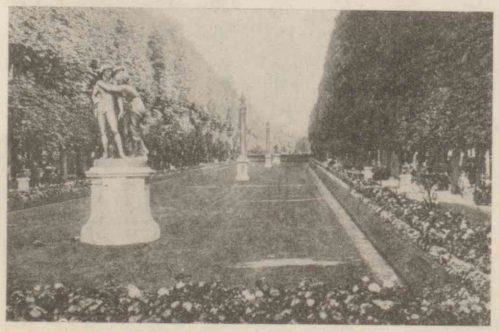
エトワール凱旋門附近

いかなる旅人でも、エトワールの方面へ足を運んで參りまして、あの凱旋門を中心に四方へ續く街路の一つに立つて見るとか、又は一つ〳〵の異なつた意匠から成立つてゐるセイヌ河の橋の一つへでも參りまして、あの兩岸に連なり續く町々の光景を望んで見るとか致しますならば、いかに大きな設計と意匠とが全體として働いてゐるかを認めないわけにはいかないだらうと存じ

リュクサンブールの公園　パリ市の中部に在る同市最美の公園
王朝時代　ブルボン王朝（1589—1792）の時代

ます。

この古く寂びた都に漂ふ空氣の中には、どういふものが流動し、凝滯するとお考へでせう。假りにこの宿から近いリュクサンブールの公園の方へ私が出掛けたと思つてみて下さい。その公園の樹木や花卉の間には、今日もまだ昔のやうに王朝時代の石像が到る處に立つてゐることを思つてみて下さい。もしその古雅な石像の側に、最新の流行に後れまいとする風俗の女が、長い鳥の羽をつけた帽子などを冠つて威勢よく歩いてゐるとしたらどんなものでせう。これは一



リュクサンブールの公園

例に過ぎません。もし私に例を引けと言はれるなら、私はかういふ不調和をいくらでもお話しすることが出來ると思ひます。あの香の煙で燻り煤けたやうなノートルダームの古塔が聳え立つ町の空に、私はすぐ新式の飛行機が高く飛揚するのを思ひ出すことが出來ます。何といふ矛盾でせう。何といふ不調和でせう。こゝには、極く舊いものと極く新しいものとが同棲して居ります。非常に蠻な感じのすることとが同棲して居ります。詩と散文とが開けたことと非常に野蠻な感じのすることとが同棲して居ります。「舊教と科學とが同棲して居ります。

ノートルダーム

ノートルダーム
パリ市の中央シテ島に在るカトリック教の大寺院

同棲して居ります。かういふありあまる程の矛盾を容れながら、全體として見れば、いかにも沈著いた好い感じを與へるところが、多くの旅人の心を引くのでせう。「システマティックで、冷靜で、意志によつたものである」と言つたフロベールの言葉をも味はつてみて下さい。

日常のことに就いて申しましても、先づ氣のつくのは、貯へて行く生活の姿といふことでございます。例へばこの宿の年とつた主婦さんなどは、リモージュといふ地方から出た女で、稼ぎ溜めた中から田舎に家屋を買ひ求めて置いて、行く行くは自分の生まれた土地で餘生を送らうと考へてゐるやうな人で、教育といふ程の教育も受けたとは見えませんが、さういふ極く普通な老婦の日常にすら、いかにも物を大切にし、珍

フロベール
1821—1880
フランスの小説家

リモージュ
フランス、オートヴィエンヌ州の都市

重し、愛玩し、またそれを何等かの方法で活用しようとしてゐることが眼につきます。こゝの食堂の壁には、左程珍しくもない佛蘭西製の皿が、さも大切らしく掛つてゐます。私はまた、この宿の主婦さんの眞黑な服を著た胸のあたりに、古い佛蘭西の銀貨が飾られてゐるのを時々見かけます。これは極く手近な例を引いたに過ぎません。古い銀貨の胸飾が好い趣味であるかどうかなどと問はずにおいて下さい。そんな物まで役に立つてゐるところを考へてみて下さい。私は當地へ參つて見て、極く微細なと思はれるやうな物まで、廢らず、粗末にされず、しかもそれが極く普通な家に置かれて特色を發揮したり生命を保つたりして行くのを見て、かういふ都にルーヴルのやうな美術館が出來たのは偶然でないことを知

ルーヴル
ルーヴル博物館
パリ市の中央セイヌ河岸に在る美術博物館

りました。

家屋の多くが石造であるといふことも、自然とこれに適して居ります。家屋の一つ〳〵は皆貯藏庫の趣があります。町全體が藏だと言つても差支はないかも知れません。新奇を競ひ目先を變へることの爲には、立派な江戸風な家屋さへどし〳〵倒されて行く東京のことに思ひ比べると、こゝの町町には實に古い建物までが大切に保存されて、中には三百年も以前の歷史を語つてゐるのがございます。假りに古い立派な店鋪が當地にあつたとして、商法上の必然な勢から店がかりを變へなければならないといふやうな場合に立到つたとしても、さういふ立派な建物を打壞して掛るといふことは、算盤づくの商人ですらしさうもありません。それほど價値

北村透谷
名は門太郎
詩人　評論家
神奈川縣の人
明治二十七年
歿　年二十七

と形式とが重んぜられてゐます。すべての物がよく貯へられてゐます。骨董的でなしに鑑賞されてゐます。こゝの町町を歩いてをりますと、例へば我が國の文學者で申すならば、「詩人北村透谷この家に死す」といふやうなことが、年號まで書き添へられて、其の家を飾つてゐるのをよく見掛けます。

この町全體が一大倉庫の趣を見せてゐることは前に申し上げました。それには風土のことも少しお話ししてみたいと思ひます。

こゝで私は自分の少年時代から住み慣れた東京の方のことをよく胸に浮かべます。それを巴里に思ひ比べてみます。そしてこの町に住む人々に比べると、自分等は外界の自然に對していかに多くの戰を續けて來たかといふことを思はずにはゐられません。

何といふ風土の相違でせう。夏は廂なしには住まはれない程の日光をうけ、家屋にも樹木にも我等が衣服や皮膚にまで附著する程の風塵を浴び、毎年きまりにやつて來る多量な雨と、濕氣と、出水の心配と、其の他多くの昆蟲のために苦しめられ、冬は一夜にして町々を灰燼に化し去る程の烈しい北風と戰つて、さういふ中で日常の生活が營まれてゐることを思ひますと、勢ひ、私達は自分等の住居をなるべく開けひろげ、大事な物は取片附け、黴びた物は乾し、汚れ易い身體は洗ふやうにして、瀟洒と清潔とを愛するやうになつたのは、極く自然なことだらうと存じます。宵越しの金は使はないなどと申して、貯へることを寧ろ卑しとした江戸つ子の贅澤も、さうした

風土が產んだものではございますまいか。

我が東京をこの巴里に比べてみますと、私はその間の相違のあまりに大きいのに驚かずにはゐられません。こゝには東京で見るやうな日光の強さも輝きもありません。年百年中、同じ著物で押通してゐる人もございます。雨量は少く、空氣は乾燥して、物の黴びるといふことも無く、蟲がつくといふこともありません。梅雨の後の蟲干なども當地にはありません。ひどい風も吹かず、塵も立たずですから、勞働でもしないかぎりは、精々月に一度の入浴でも濟ませるわけでございます。

しかし私は、東京の方の生活が絕えず火水に責められ通しであることを殘念だとばかりは思ひません。激しい自然との戰は、我等の生命を潑剌たらしめるもののあることを信じます。

東京のやうな氣候の變化の多いところに住み慣れた私にとつては、何時の間に夏が過ぎ去り、何時の間に秋が來たのか、その差別のつきかねるやうな當地の氣候が、何となく物足りなく思はれることがございます。美しいとは思ひますが、時とすると、喰ひ足りないやうな氣も致します。ざあと夕立でも來て吳れゝば好いなあと思ひ〳〵してゐるうちに秋が來て、蜻蛉一つ町の空に飛んで來るのを見ないうちに、早、秋は暮れて行きます。大風が吹いて一晩の中に竝木が倒れるなどといふことも無ければ、蟲のために損はれる憂も少いこの土地にあつては、町々の樹木の完全な發育が見られ、幹から梢ま

でその全景を樂しむことが出來ます。そのかはり、綠などが何となく力弱く、灰色がかつて見えます。多少の油蟲などが附著してゐても、もつと生氣の強い、もつと繁殖力の熾な故鄉の樹木が見たいと思ふことがございます。雨量は少く、地震の心配も無いかはりには、青空などもどんよりと致して居りまして、明るい、からつとした東京の方の晴れた空が見たいと思ふことがございます。月の光もこゝでは薄く思はれます。ちやうどあのヴェルレーヌの詩の中にあるやうな黃ばんだ月が、黃昏時になると窓の外にぼんやりと掛つてゐるのをよく見かけます。

ヴェルレーヌ　1844—1896　フランスの詩人

自分等の性質の中に、單調に耐へられないやうなところのあるのは、新陳代謝の激しく行はれる母國の風土から自然と

激成されたものかとも思ひます。極く靜かに移り變つて行くやうな當地では、月日のたつといふことを東京程に感じません。東京の三月は巴里の三年にも對ふやうな氣が致します。

今更申し上げるのも妙なものですが、私は無暗に西洋の文明に心醉して遙々當地まで出掛けて參つたものではございません。巴里を讃美する爲にこの机に對つてゐるものでもございません。けれども、自分等に起り易いセンティメンタリズムから、萬事小癪に觸るといつたやうな冷笑的の氣分を離れたいと思ひます。感心されるだけ感心したいと思ひます。私は佛國汽船「エルネスト・シモン」で神戸からマルセイユまで乘つて參る間に、いかに歐羅巴人が東洋の港々で努力し

マルセイユ　フランス南岸リヨン灣にのぞむブーシュ・デュ・ローヌ州の港市

つゝあるかを見て參りました。それから當地へ參つて見て、佛蘭西人が誇とする巴里のやうな都が出來たといふのも、決して偶然ではないことを思ひました。それを藝術の都であらしめ、文明の泉源であらしめ、流行と風俗の中心であらしめるといふことの爲には、佛蘭西人の努力は遠く東洋の果にまで及んでゐることを知りました。彼等は、日本からも、支那からも、印度からも、埃及・土耳其・波斯からも、その他あらゆる地方から、集め得るかぎりのものを集め、採り得るかぎりのものを採つて、それで彼等の生活を豐富にし、彼等の異國情趣を滿さうとしてゐることを知りました。彼等は野蠻な音樂や獰猛な色彩までも取容れて、その生活を飾らうとしてゐることを知りました。から思つて見て來ると、そこに廣い世界的の

ロココ式　十七世紀末葉から十八世紀末葉に亙りフランスに起つた美術の樣式

ルネッサンス風　文藝復興期に於ける美術の樣式

意味のあることが感じられます。單なる摸倣では無くて、意匠の加つた創作であることが思はれます。佛蘭西人程スタイルといふものを重んずる國民も稀でせう。古いロココ式の建築も、ルネッサンス風の公園も、相集り相合奏して一つの大きな都會美を形造つてゐるやうな巴里へ來て見て、スタイルといふものが始めて意味のあるもののやうな心地も致します。かういふ文明を造り上げた人達の一人々々に就いて見れば、隨分不器用なと思つて驚くことがある程です。それでゐながら全體として爲たことを考へてみますと、ある一個の天才が動いて行つたやうな趣を示してゐます。

（巴里だより）

和辻哲郎
哲學者
文學博士
東京帝國大學
教授
兵庫縣の人
明治二十三年
生

大地震
關東大震災
大正十二年九
月一日

銀座
東京市京橋區
銀座

シンガポール
マレー半島の
南端シンガポ
ール島に在る
港市

三　城

和辻哲郎

大地震以後、東京に高層建築の殖えて行つた速度はかなり早かつたといつてよい。毎日その進行を傍で見てゐた人達は、それ程にも感じなかつたであらうが、地方から稀に上京する者には、それが顯著に感ぜられた。六七年前、銀座で食事をして外へ出たとき、痛切にシンガポールの場末を思ひ出したことがある。往來から夜の空の見える工合がさういふ聯想を呼び起したのかと思はれるが、その時には新しく建設せられる東京が如何にも植民地的であるのを情なく思つた。併し、その後二年も經つと、シンガポールの場末といふ感じはなくなつた。追々高層建築が建ち竝ぶに隨つて、部分的には堂

東京驛
東京市麴町區
丸の内に在る
東海道線の起
點

和田倉門
舊江戸城東方
の城門
同區元千代田
町に在る

堂とした通も出來上つて來た。全體としては亂雜な、半出來の町でありながら、しかも何處かに力を感じさせる不思議な都會が出現したのである。

この復興の經過の間に、自分を非常に驚かしたものが一つある。二三年前の初夏、久しぶりに上京して、東京驛から丸の内の高層建築街を拔けて壕端へ出たときであつた。壕に面して新しい高層建築が建ち揃つてゐる。こゝがあの荒れ果てた三菱ケ原であつた時分を思ふと、全く隔世の感がある。併し、自分を驚かしたのはこの建ち竝んだ西洋建築ではない。これらはむしろ平凡なものである。それよりも、これらの建築に對して靜かに眠つてゐるやうなお壕の石垣と和田倉門とが、實に鮮かな印象を以て自分を驚かしたのである。柔ら

かに枝を垂れてゐる壕端の柳、淀んだ壕の水、さびた石垣の色、さうして古風な門、――それらは一つの纏つた藝術品として、對岸の高層建築を威壓しきるほどの品位を見せてゐる。自分は以前に幾度となくこの門の前を通つたのであるが、併しこゝにこれほどまで鮮かな藝術を見出したことはなかつた。その後この門が修築せられたにもしろ、以前とさほど形を變へたわけではない。何がこのやうに事情を變ぜしめたのであらうか。他でもない、壕端に竝んだ高層建築なのである。それが明白に異なつた樣式を以て

和田倉門

石垣と門とに對立したとき、石垣や門はいはば額縁の中に入れられた。即ち、それらは己自身になつた。そこで、石垣や門の持つてゐる固有の樣式がまた明白に己自身を見せ始めたのである。石垣や門の屋根などの持つてゐる彎曲線は、對岸の西洋建築には全然見出されないものである。石垣の石の積み方も、規格の統一とはおよそ縁のない、また機械的といふ形容の全然通用しない、隨つて、それ〴〵の大きさ、それ〴〵の形の石に、それ〴〵の場所を與へたあの悠長なやり方である。それらは最早現代には用ゐられ得ぬものであるかも知れない。併し、それによつて形成せられた一つの樣式がその特殊の美を持つことは、消し去るわけにはゆかないのである。復興された東京を見て廻つて感じさせられたことも、結局

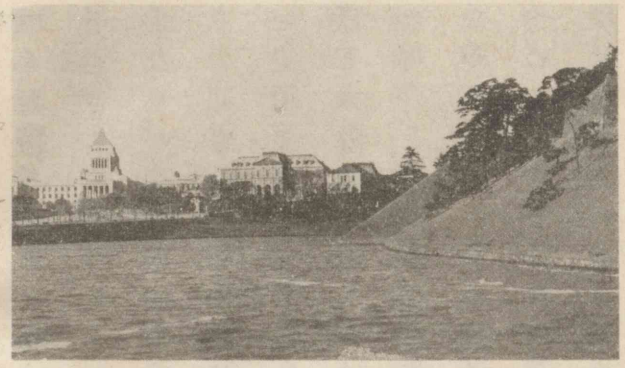
櫻田門　外櫻田門　舊江戸城南方の城門　麹町區祝田町に在る

議事堂　大日本帝國議事堂　同區永田町に在る

はこれと同じであつた。巨大な歐米風建築に取圍まれた宮城前の廣場に立つて沁々と感じさせられることは、江戸時代の遺構が實に強い底力を持つてゐるといふことである。それは、周圍に對立者のない時にはさほど目立たなかつた。それほど何氣のない、なだらかな、當り前の形をしてゐるからである。然るに、その「何にもない」と思はれてゐた形の中から、對立者に應じて潑剌としたものが湧き出て來る。

例へば櫻田門がそれである。あの門外で眺められるお壕の土手はかなりに高い。併し、それは穩な、またなだらかな形の土手であつて、必ずしも偉大さ力強さを印象するものではなかつた。然るに、今この門外に立つて見ると、大正・昭和の日本を記念する巨大な議事堂が丘の上に聳えてゐる。さうして間近には警視廳の大建築がそゝり立つてゐる。さうなると、あのなだらかな土手が不思議にも偉大さを印象し始めるのである。あの壕と土手とによる大きい空間の區切り方には、異樣に力強い壯大なものがある。暫く議事堂や警視廳の建築を眺めたあとで、眼を反らしてお壕と土手とを眺めるならば、恰も舞臺の上で、刺戟的な藝のあとで無言の腹藝を見るやうな、若しくは才氣煥發の人に接したあとで無爲にして化する人に逢つたやうな、深い喜を感ずるであらう。

警視廳　同區外櫻田町に在る



櫻田門外より議事堂を望む

さうして更に門内に歩み入つて、古風な二つの門と、さびた石垣と、お壕と土手とだけで出來てゐる靜寂な世界の中に立つと、過ぎ去つて行かうとする世界にも、どれほど眞實なもの偉大なものがあるかを感ぜずにはゐられないであらう。

少し感じは異なるが、大阪城も亦古い時代を記念する大きい遺蹟である。中之島あたりに高層建築が殖えれば殖えるほど、大阪城の偉大さは增して來る。さうしてそれは、江戸城の場合とは異なつて、先づ何よりもあの石垣の巨石にかゝつてゐる。あの巨石は決して「何氣のない」「當り前」のものとはいへぬ。のしかゝるやうに人を威壓する意志があそこには表現せられてゐる。たゞ石垣に竝べただけの石にそんな表現があるものかといふ人があるかも知れない。併し、大阪城を

見る人は、誰だつてあの石には驚くのである。何故驚くか。さういふ巨石を大阪まで持つて來て石垣の石として使ひこなしてゐる、その力に驚くのである。

自分はあゝいふ巨石運搬についての詳しい事情は知らないが、專門家の研究を瞥見したところによると、結局は多衆の力によるらしい。併し、その多衆の力といふものが、個々の力を累計したものでなく、一つの全體的な力に統一されなくては、巨石は動かないのである。煉瓦を積んで大伽藍を造る場合にも多衆の力は働いてゐるが、その力は煉瓦を運ぶ個々の力の集積であつてよい。巨石運搬の場合には、大綱に取りついた無數の群集と、その群集の力を一つにまとめる指導者とが必要である。繪で見ると、巨石の上には扇をかざした人が

祇園祭
京都市東山區祇園町に在る官幣大社八坂神社の祭禮

踊つてゐる。それは、全身を指揮棒に代へて群集の呼吸を合はせてゐるのである。現在、京都の祇園祭の山車の引き方は、その幽かな遺習であるかも知れない。大阪城の巨石の如きは、何百人何千人の力を一つの氣合に合はせなくては、一尺を動かすことも出來なかつたであらう。それでもまだ、どうして動かせたか見當のつかない程の巨石がある。さういふ巨石を數多くあの丘の上まで運んで來るためには、どれほどの人力を要したか解らない。その巨大な人力が凝つてあの城壁となつてゐるのである。その點に

大阪城の巨石（蛸石附近）

ピラミッド
金字塔
エジプト王朝時代に作られた角錐體狀の墳墓

コロッセウム
フラヴィアン劇場の異稱
古代ローマ最大の圓形劇場

於ては、埃及のピラミッドも、羅馬のコロッセウムも、大阪城に及ばない。しかも、さういふ巨大な人力をあの城壁に結晶させた豐太閤は、現代に至るまで三百餘年間、京都・大阪の市民から讃美され續けて來たのである。さうしてそれを記念する醉舞の行列は、歐米風の高層建築の竝んだ通をも、今猶練つて行くのである。

併し、お城が偉大さを印象するといふことは、封建時代を呼び返さうとすることでもなければ、また封建時代的な營造物を新しく作るやうに要求することでもない。唯それ〴〵の時代は、その弊害や弱點を持つと共に、またその時代固有の偉大さを持つてゐるといふ事實の認識に過ぎない。

これらのことを思ふとき、それ〴〵の文化產物は、それに固

有な樣式に著眼して鑑賞し理解せられねばならぬことを痛感する。人は、それ〴〵の時代的・風土的な特殊の樣式に對して、眼鏡の度を合はせることを學ばねばならない。さうすることによつて、それ〴〵の物が鮮明に見え、その物の持つ意義が讀み取られ得るのである。自分にとつて鮮明でないからといつてその物を無意義とするのは、一種の主觀主義である。我々は日本の文化の現狀をこの程度に留らせてはならないと思ふ。歐米文化の咀嚼に於ても、また自國文化の自覺に於ても。

夏目漱石
名は金之助
英文學者　小說家
東京市の人
大正五年歿
年五十

四　東洋の詩境

夏目漱石

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出來る。

人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。矢張向う三軒兩隣にちら〳〵する只の人である。只の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも尙住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐にするが故に尊い。

○住みにくき世から、住みにくき煩ひを引拔いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば、寫さないでもよい。唯まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。著想を紙に落さずとも、琢鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向かつて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。唯己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足りる。此の故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜の深きとき憂愈深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寐る間も心配だらう。閣僚の肩は數千萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。

少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損つた。平衡を保つ爲に、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋合はせをすると共に、余の腰は工合よく方三尺程な岩の上におりた。肩にかけた繪具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸に何の事もなかつた。

立ち上る時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せた樣な峯が聳えて居る。杉か檜か分からないが、根もとから頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、繼目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行手は二町程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあそこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら左程手間もいるまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切り碎いても、巖は始末がつかぬ。掘り崩した土の上に悠然と峙つて、我等の爲に道を讓る氣色はない。向うで聞かぬ上は、乘り越すか廻るかしなければならぬ。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫ぬいて居ると評してもよい。路を行くと云はんより川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら〳〵と七曲へかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて居るか、影も形も見えぬ。唯聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶え間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴き盡くし、鳴き明かし、又鳴き暮さなければ氣が濟まぬとみえる。其の上、どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。昇りつめた擧句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、唯聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

巖角を鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあそこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛び揚つてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、揚る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、揚る時も、また十文字に擦れ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて、正體がなくなる。唯菜の花を遠く望んだ時に目が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

シェレー
1792—1822
イギリスの詩人

P.B. Shelley

We look before and
after and pine for
what is not:
Our sincerest laughter
with some pain is fraught;
Our sweetest songs are
those that tell of
saddest thought.

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで諳誦してみたが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかにこんなのがある。

前を見ては、後へを見ては、物欲しとあこがるる
かな、われ。
腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。
うつくしき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠る
とぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れ

ぬ。してみると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭座して居る。暢氣なものだ。又、考をつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、唯嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も——櫻はいつか見え

なくなつた。かう山の中へ來て、自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

併し、苦しみのないのは何故だらう。唯此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする料簡も起らぬ。唯此の景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此の景色が、景色としての余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き〳〵した。飽きた上に、芝居や小説で同じ刺激を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出ることが出來ぬのが彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粋なるものも、此の境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じる。

て居る。シェレーが雲雀を聞いて歎息したのも無理はない。

うれしいことに、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下。悠然見南山。

只それぎりの裏に暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の人が覗いて居るわけでもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に、利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不知。明月來相照。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寐込むやうな功德である。二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世

採菊東籬下
結廬在人境。
而無車馬喧。
問君何能爾。
心遠地自偏。
採菊東籬下。
悠然見南山。
山氣日夕佳。
飛鳥相與還。
此中有眞意。
欲辯已忘言。
（陶淵明）

南山
終南山
現中華民國陝西省に在る

獨坐幽篁裏の詩
王維

不如歸
小說
德冨蘆花作

金色夜叉
小說
尾崎紅葉作

紀に此の出世間的の詩味は大切である。

惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵暢氣な扁舟を泛べて此の桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようといふ心掛けも何もない。唯自分にはかういふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。「ファウスト」よりも、「ハムレット」よりも、有難く考へられる。かうやつて、只一人繪具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵あるくのも全く之が爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

（漱石全集）

桃源
武陵桃源
陶淵明の桃花源記に見える

王維
王摩詰
支那唐代の詩人・畫家
皇紀一四二〇年歿

淵明
陶淵明
支那晉代の文豪
皇紀一〇八七年歿

ファウスト
劇詩
ドイツの文豪ゲーテ作

ハムレット
戲曲
イギリスの文豪シェークスピヤ作

五　生活の藝術

大須賀乙字
名は績
俳人
東京音樂學校
教授
福島縣の人
大正九年歿
年四十

世阿彌
世阿彌元清
能役者　能作者
觀世大夫第二世
芭蕉
松尾芭蕉
名は宗房
蕉風俳諧の祖

寫生は寫生だけで一つの目的を達して居り、又それだけで一種の藝術であるけれど、創造の世界を示して呉れるものではない。そこは寫意に待たねばならぬ。而して寫意は實に劍刃の上に立つのである。一毫千里のむつかしい所がある。自然の前に謙遜で忠實で、しかも自由で放膽で、少しも自然を離れず、空想をまじへず、瞑想に陷らずしての上での話である。世阿彌に花實の論がある。芭蕉に虛實の說がある。實のみに就けば寫生になる、花にのみ就けば空想になる。實を踏まへての花は「心の匂」である。「性格美」である。又、作者その人の境涯から出る感情である。境涯あつて自然は生きて來る。

表現しなければならぬものがつかまるのである。その時何として寫生の繁に堪へよう。況や、僅々十七字內外の俳句にあつては、描寫はその能くするところにあらず、喚起し暗示するのであるから、專ら寫意に行かなければならぬことはいふまでもないのである。しかし、作者に境涯があつて、情意活動のはげしいものがあらうとも、そのまゝでは俳句にはならない。山靜かにして草木生ずといふ。靜かなる中に俳句の機緣が熟するのである。閑寂を旨とする自然靜觀の藝術がこにある。

今の文壇の作も評論も、單に文壇にのみ生息する人々の間に於てのみ言ひ交されて居る。それも社會生活の一部に相

違なからうが、比較的我がまゝの主觀的情緒を力強く主張するのが藝術家の本領とせらるゝ自由の世界に住む人達であつて、民族生活卽自己の生活であることを痛感しない人達のやうに思ふ。　家族的關係・社會的關係が自己の情意を枉げんとするを嫌ひ、この不可抗の自然に隨ふのを妥協・因循となし、個性を發揮するのを戰鬪と心得る者が多いが、僕はかういふ人事の上に個性をふるまはず、忍び行くゆゑにこそ、眞の個性が一切を攝取して行くのであると信ずるのである。

人事の上にあつては、現實より一歩をたじろがず、事忌みせず、目をそむけず、最善の法を取つて進まねばならぬ故に、こは意志の生活である。　少くとも、意志によつて統御せられ、實行せられねばならぬ故に、瞑想の餘裕を許さない。　こゝに詩歌の產まるゝは、實行し得ざるの時の叫か、或は實行し得たる歡の叫であらねばならぬ。　すべて意力が溢れ出てゐねばならぬ。　生活を眺めたり、その倦怠をうたつたりしたのは詩ではない。　意志に統御せられない感情の女々しさなどは遊戲である。　淋しいの悲しいのなどいふよりも、實行して默してゐる方がいゝのである。　すべて人事を歌ふことは、意力の表現にならなければ、僕にはつまらないのである。

人事は實行すべきものである故に人事である。　現在を處理して行かねばならぬものが人事である。　しかしわれらには現在に對する過去と未來、人事に對する天然がある。　この對照によつてわれらの生活は深さと廣さとを增し、現實に對する感を強めるのである。　現在の成敗に囚れずして未來と

理想とが開けるのは、過去を窮盡することと天然に參することとに依つてである。少年のこゝろ、少年の氣分が全く消え失せた人や、天然に深い親しみを持たずに育つた都會人にあつては、この原始的生活の要素は稀薄となり、われらの境地に入ることは不可能なのである。心をとめて見れば、彼の愛すべき犬や馬や小鳥や蟲に至るまで、都會にあつては原始的情態を失つてゐる。人事にあつては文化の進むのが自然の推移であるから、敢へてこれを避けんとはしないが、自然物に於ては馴された動物やひねくれた樹木は、僕は嫌ひだ。處理しなければならぬ人事の外に、天然の存することは人生の歡である。責務・奮鬪の生活に疲れたわれらを、その優しき胸に抱いてくれるものは天然である。われらの生活に天然が入つて來なければ人生は極限された世界に窮屈の思をしなければならぬ。

思案にもだえた時の句はものにならぬ。しかし、思案に耽らなければ、思案の外に出ることは出來ない。

偶然に名句を得るといふことがあれば、それは苦勞しぬいたから偶然があるので、句作の苦勞の經驗なくては絶對に名句は產まれないのである。

（乙字俳論集）

六　奥の細道

松尾芭蕉

門出

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に

松尾芭蕉
名は宗房
蕉風俳諧の祖
伊賀國（三重縣）の人
元祿七年（一三五四）歿
年五十一
月日は云々
夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。（李白）
去年の秋
元祿元年九月
江上の破屋
芭蕉庵
現東京市深川區常盤町に在つた
白河の關
現福島縣西白河郡古關村に在つた
松島
現宮城縣松島灣一帶の稱

譲り、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住み替る代ぞ雛の家

彌生も末の七日、明けぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乘りて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里の思胸にふさがりて、幼の巷に離別の涙を濺ぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず、人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、唯かりそめに思ひたちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳にふれていまだ

杉風
杉山杉風
芭蕉の門人
江戸の人
享保十七年（一三九二）歿
年八十六
上野・谷中
共に現東京市下谷區の内
千住
現同市足立區千住及び荒川區南千住町
元祿二とせ
二三四九年
東山天皇の御代
奥羽
現奥羽地方

草加　現埼玉縣北足立郡草加町
いかで都へ、云々　たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の關は越えぬと　（拾遺集）
秋風を云々　都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關　（後拾遺集）
紅葉を云々　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關　（千載集）
古人云々　袋草紙に見える竹田大夫國行の逸話

目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり著きにけり。

痩骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。唯身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

白河

心許なき日かず重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠

清輔　藤原清輔　歌人　歌學者　治承元年（一八三七）歿　年七十四
曾良　河合曾良　芭蕉の門人　信濃國（長野縣）の人　寶永七年（一三七〇）歿　年六十二
洞庭　洞庭湖　現中華民國湖南省に在る　西湖　現同國浙江省に在る
浙江　錢塘江　現同省杭州府を流れて錢塘灣に注ぐ
大山つみ　大山祇神

を正し、衣裝を改めしことなど、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

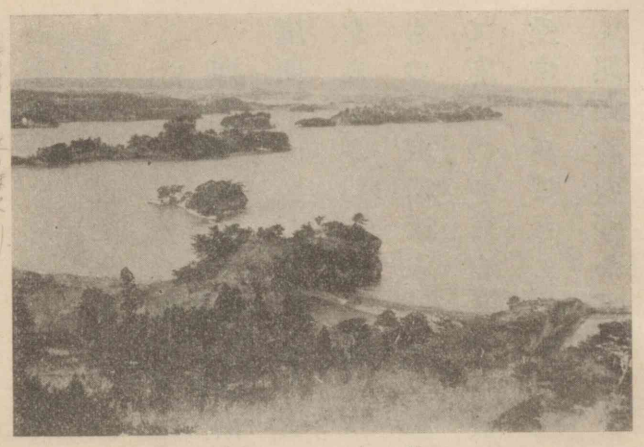
卯の花をかざしに關の晴著かな　曾良

松島

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる

雄島　松島灣内の島
雲居禪師　希膺　臨濟宗の僧、萬治二年（一三一九）歿年七十八
素堂　山口素堂　俳人
芭蕉の友人　原安適　醫師
芭蕉の友人　濁子　中川濁子　芭蕉の門人
平泉　現岩手縣西磐井郡平泉村
あねはの松　現宮城縣栗原郡澤邊村に在つた
緒だえの橋　現同縣志田郡古川町に在る
石の卷　現同縣石卷市こがね花咲く萬葉集の歌
金華山　現宮城縣牡鹿半島の東南に在る島山

わざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。



松島

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に世をいとふ人もまれ〳〵見え侍りて、落穗・松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、

風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかる時、素堂、松島の詩あり、原安適、松がうらしまの和歌をおくらる。袋を解いてこよひの友とす。かつ、杉風・濁子が發句あり。

平泉

十二日、平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎・蒭蕘の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金華山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立ちつゞけたり。思ひがけず斯か

袖のわたり　石巻市の北に在つた渡し場
尾ぶちの牧　同市の東方に在つた小牧場
まのの萱原　現宮城縣牡鹿郡稻井村眞野の野
戸井麻　現同縣登米郡登米町
三代　藤原清衡・同基衡・同秀衡
秀衡　鎭守府將軍・陸奥守　文治三年（一八四七）歿
金雞山　秀衡が築いた平泉鎭護の山
高館　源義經の居館
南部　現盛岡市以北

る所にも來れるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まのの萱はらなどよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸井麻といふところに一宿して平泉に到る。其の間二十餘里程とおぼゆ。

北上川と高館

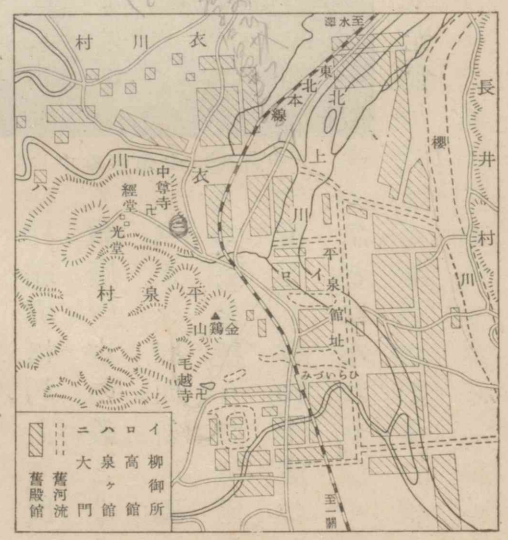
三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川

和泉が城　秀衡の子和泉三郎忠衡の館
泰衡　藤原泰衡　秀衡の子　陸奥押領使　文治五年歿
衣が關　高館の北方、現岩手縣膽澤郡前澤町に在つた
南部口　南部方面から平泉への入口
義臣云々　文治五年義經は泰衡の爲に高館に襲殺された
國破れて云々　國破山河在。城春草木深。（杜甫）
兼房　增尾兼房　義經の臣

は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　　曾良



平泉附近圖

二堂　現平泉村に在る天台宗の名刹中尊寺の經堂及び金堂（光堂）共に清衡の建立

國寶建造物

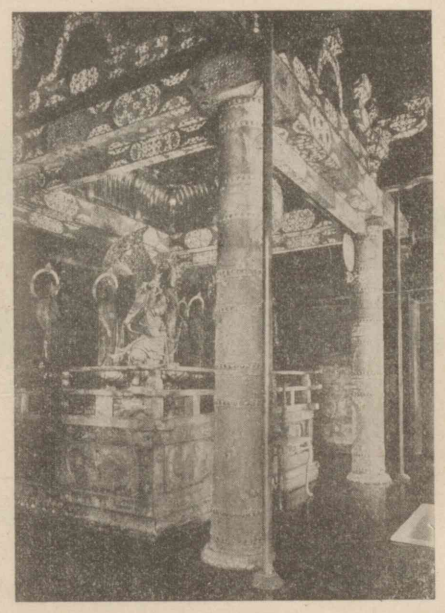
三尊の佛　彌陀三尊

立石寺　現山形縣東村山郡山寺村に在る天台宗の寺

山形領　出羽國山形藩の領内　現山形市を中心とする附近一圓の地

慈覺大師　圓仁　天台座主　貞觀六年（一五二四）歿　年七十一

豫て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍みて、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。



中尊寺光堂（内陣）

五月雨のふり殘してや光堂

立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にして、

尾花澤　現山形縣北村山郡尾花澤町

最上川　現山形・福島兩縣界に發源し山形縣の中部を貫流して日本海に注ぐ

山形　現山形市

みちのく　陸奥

陸奥國　現青森・岩手・宮城・福島四縣の地

板敷山　現山形縣最上・東田川兩郡の界に在る

酒田　現同縣酒田市

白絲の瀧　現最上郡大藏・古口兩村の界に在る

殊に清閑の地なり。一見すべきよし人々のすゝむるにより、尾花澤よりとつてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院院扉を閉ぢて物の音きこえず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてんはやぶさなどいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に舟を下す。これに稻つみたるをや稻舟といふならし。白絲の瀧は青葉の

仙人堂　現古口村に在る
義經の臣常陸房海存を祀る
象潟　現秋田縣由利郡象潟町の北に在つた入江
鳥海の山　鳥海山　現山形縣飽海郡に在る　海拔二二三〇米
能因島　能因法師閑居の跡と傳へる
花の上こぐ云々　きさかたの櫻は浪にうづもれて花の上漕ぐあまの釣舟（傳西行）
西行法師　俗名佐藤義清　建久元年（一八五〇）歿

隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

象潟

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごをふみて、其の際十里、日影やゝかたぶく頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に摸索して、雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の霽るゝを待つ。其の朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮かぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡を訪ひ、むかふの岸に舟を上れば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行

神功皇后　第十四代仲哀天皇の皇后
干滿珠寺　現象潟町に在る曹洞宗の寺
むやむやの關　無耶無耶關　現山形・秋田兩縣の界に在つた
秋田　現秋田市
汐ごし　汐越　現象潟町の内

法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。

象潟より鳥海山を望む

此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影うつりて江にあり。西はむやむやの關、路をかぎり、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海、北にかまへて浪打入る所を汐ごしといふ。江の縦横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。

西施　支那春秋時代の越の美人
出雲崎　現新潟縣三島郡出雲崎町
加賀の府　現金澤市
鼠の關　現山形縣西田川郡念珠關村に在つた
越後　越後國　現新潟縣の内越中の國　現富山縣一ぶりの關　市振關　現新潟縣西頸城郡市振村に在つた
佐渡　佐渡島　日本海の島　現同縣佐渡郡を成す

寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花
汐越や鶴はぎぬれて海涼し

出雲崎

酒田の名殘日を重ねて、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず
荒海や佐渡によこたふ天の川

金澤

卯の花山　くりから峠邊の山といふ
くりから　俱利伽羅峠　現富山・石川兩縣の界に在る礪波山の峠
大坂　現大阪市
何處　俳人
一笑　小杉一笑　芭蕉の門人　加賀國（石川縣）の人　元祿元年（二三四八）歿　年三十六　其の兄　小杉ノ松
奥の細道　一卷　紀行

卯の花山・くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。こゝに大坂よりかよふ商人何處といふ者あり。それが旅宿を俱にす。一笑といふものは此の道にすける名のほのゝ聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あかゝと日はつれなくもあきの風

（奥の細道）

七陽炎

松尾芭蕉

枯芝やゝかげろふの一二寸
雲雀より上にやすらふ峠かな
ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音
辛崎の松は花より朧にて
くたびれて宿かるころや藤の花
六月や峯に雲おく嵐山
清瀧や波に散り込む青松葉

辛崎の松　現滋賀縣滋賀郡下坂本村に在った
嵐山　現京都市右京區に在る
清瀧　清瀧川　現京都府葛野郡に發源し右京區を流れて嵐山の北西で大堰川に入る

ほととぎす大竹藪をもる月夜
ひや〳〵と壁をふまへて晝寐かな
菊の香や奈良には古き佛達　奈良　現奈良市
稲づまや海の面をひらめかす
月はやし梢は雨を持ちながら
寒菊や粉糠のかゝる臼の端
初しぐれ猿も小蓑をほしげなり
埋み火や壁には客の影ぼふし

八　能樂の特質

戸川秋骨
名は明三
英文學者
慶應義塾大學
講師
熊本縣の人
明治三年生

戸川秋骨

能樂は普通にいふ劇ではない。ドラマティカルな場面を取入れた曲もないではないが、大體において抒情的である。卽ちある一つの情調を徹底的に表出するにつとめる。それには、謠の調子、演者の動作の大事なことは素よりであるが、それと共に重要な事は、その被る面を第一として、衣裳その他の身邊のものが、すべてその情調に合ふやうになつてゐることである。事實、その衣裳は微細の點に至るまで、曲そのものの示さんとする情調に適應してゐるのである。隨つて、演者の動作は、極めて微細な點にわたつて、その氣分・情調を體現しなければならない。同時に觀者も、その微細な點までも味はは

なければならないことになる。その味はいはゆる細かい味である。素より纖細な味のものばかりではないが、決して大味なものではない。むしろ強烈な味、放膽な味のものがあるといつて然るべきであらうか。

能の演者の主なるものは、これをシテと呼ぶが、それには必ずワキを要し、更にツレなるものがある。しかし、シテ方は如何なる場合にもシテ方であり、ワキは常にワキである。それが家柄として極つてゐて、シテがワキを勤める場合、ワキがシテになる場合は、戯れの場合を除いては、絶對にない。更に一曲の能には、地謠の必要があるが、これがまた、一人の地頭なるものの統率の下に、個々の働を滅して、全體としての聲に生き

なければならず、更にまたそれが全體として、シテに奉仕しなければならないのである。さういふ謠ひ方では舞へない』といはれゝば、謠の方では、それに對して何とも返す言葉がないと、ある地謠の人のいつたのを聞いたことがあるが、これによつても、謠全體が演者シテに奉仕するものであることが察しられる。

なほ、もう一つ樂器の方、即ち囃子方であるが、これも地謠と同樣、その主眼とする所は、演者の動作を助けるものに外ならない。もしそれが、演者の動作とちぐはぐな拍子をうつてゐたならば、シテの演戲の價値は、どれ程減殺されることであらう。それ故、一つの完全なる演戲の出來るのは、シテの動作と、囃子――太鼓・小鼓・大鼓・笛――の調子と、謠とが、ぴたりとそろ

つた所にあるのである。

誰もいふことであるが、能樂の趣は象徴的である、暗示的である。決して露骨に、若しくは明白に、また敍述的に表出することをしない。私はよくいふ、「謠は楷書の一の字のやうなものである。極めて簡單であるが、それだけ難しく、ごまかしの餘地もなく、同時に象徴的で、暗示的である」と。これは能においても、一層適切にいひ得る。初めにいつた通り、内へ内へとこもつた藝術であるから、象徴的・暗示的になるのは、自然の理である。たとへば、能のそれ〴〵の曲を代表する面は、その背後にあらゆるものを包藏してゐるかと思はれる程に暗示的である。が、更にその面をつけた演者が、極めて僅か顏を上げ

松風　能樂の代表的な曲の一

るか下げるかするによつて、多大な意義がそこに表出される。喜怒哀樂が、その面の少しばかりの動かし方によつて顯されるのである。たとへば「松風」の曲のやうなもので、シテが舞臺を少し前の方に進んで、前方を打眺めるやうに、ちよつと面を左から右へと動かせば「蘆邊の田鶴こそは立騒げ」といふやうな、水邊の靜閑な趣がありゝゝと現出して來る。「それは、觀者の主觀によるので、さう思ふから、さう見えるのだ」といふ人があるかも知れない。それは如何にもその通りである。極めて主觀的な話である。しかし、主觀的にさう感じさせるものは、矢張演出そのものに、さういふ象徴的な所があるからである。

私は、自分の狹い見聞を以てすれば、古今の藝術で、この能樂ほど緊張したものはないと思ふ。前にいつた通り、微細な點に注意しなければならないとすれば、それはたゞあくまで緊張するやうになる。また、それは緊張による外、達し得られないであらう。ちよつと面を動かして喜を表し、頭を下げて悲しみを示す藝術であるなら、その面の動かし方に非常な意義が附隨するのであるから、緊張しなくてはならないわけである。能樂は、第一神事、第二修羅物、第三鬘物、第四現在物、第五天狗般若類から成るので、正式にいへば、必ず一度にこの五番を演ずるのであるが、私は、よく普通の人が五番を見るに堪へられたものだと、それを異樣に感ずるものである。それを觀るには、六七時間の緊張をつゞけなければならないからである。

修羅物　戰爭に打勝として修羅道（六道）に落ちつた所の武士の亡靈がかあらはれて旅僧に戰爭の模況などを語つてその因縁を頼むといつた風なもの。

神事物　日本國の繁榮を祈るもので、神社の緣起和歌を材料として三代に関係のあるところの神靈をあらはし、その神靈が神樂を演ずるといつた曲。

鬘物　源氏物語、伊勢物語などに材料をとつてある女性を材料にしてそれ等の女性に變化して謡ひ舞ひ語らせて優雅なる舞をさせるといつたもの。

八　能樂の特質

緊張味に次いで、能樂につきものは、その力である。前にいつた緊張味も、この力から來るのであらう。素より力といつて、たゞ眞面目腐つて力こぶを入れた所で、立派な能が演じられるものでもない。その力なるものが、自然に演者の身に體現し、演者の普通に靜かに身體を動かすのが、觀者に非常な力となつて見えるやうにならなければ完全とはいへない。立派な演者なら、たゞ直立してゐても、それが磐石のやうな感を與へる。始めて能を見たある人の言であつたが、さる演者の能を見て、「あの人の立つてゐるのは、まるで樹が地から生えてゐるやうな感を與へますね」といつた。全くそれ程の力を以て演者は立つてゐるのである。立派な演者の踏む足拍子は、

光悅
本阿彌光悅
刀劍鑑定家
畫家　工藝家
茶人
寛永十四年
（一二九七）歿
年八十一

宗達
俵屋宗達
江戸時代初期
の畫家
光琳派の祖
歿年未詳

そこから火炎が飛び立つかと思はれるほどである。

しかしこれは、力といふよりも、別の能力かも知れない。何か自然の間に、その根柢をもつてゐるある働であるかも知れない。何となれば、武勇を表すもの、怪異を表すものにおいては、力といつても差支ないが、その同じ力なるものは、柔らかいもの、優しいものにも顯れてゐるからである。これは、能樂に限つたものでもなく、光悅や宗達の畫などにも目立つてゐる所であるが、能樂にはそれが際立つて顯れてゐるやうである。強いものは勿論のことであるが、弱いもの、優しいものにも、自ら有してゐる自然の力とでもいふより外に、私は說明の能力をもつてゐない。とにかく、この力こそ能樂のもつとも緊要な條件の一つである。

（能樂禮讃）

九　鉢の木

人物

前ジテ　佐野常世
ツレ　佐野常世妻
前ワキ　旅僧（最明寺時頼）
後ジテ　佐野常世
後ワキ　最明寺時頼
ワキヅレ　時頼の近侍
狂言　時頼の從者

處

前段　上野國佐野
後段　相模國鎌倉

佐野常世
實傳未詳

最明寺時頼
北條時頼
鎌倉幕府第五代の執權
弘長三年（一九二三）歿年三十七

上野國佐野
現群馬縣群馬郡佐野村

相模國鎌倉
現神奈川縣鎌倉郡鎌倉町

信濃なる云々
信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やはとがめぬ（伊勢物語）

淺間の嶽
淺間山
現長野・群馬兩縣に跨がる

大井山
現長野縣北佐久郡に在つた山かといふ

友の里
現同縣南佐久郡野澤町附近

離坂
現北佐久郡に在る離山の坂

碓氷川
現長野・群馬兩縣界に發源し高崎市の西で烏川に入る

板鼻
現群馬縣碓氷郡板鼻町

時

前段は冬（十二月）　後段は數箇月後

ワキ　〈行方定めぬ道なれば、行方定めぬ道なれば、來し方もいづくならまし。

ワキ　「これは一所不住の沙門にて候。われこの程は信濃國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

〈信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに著きにけり、佐野のわたりに著きにけり。

「急ぎ候程に、上野國佐野のわたりに著きて候。あら笑止

や、また雪の降り來りて候。この所に宿を借らばやと思ひ候。

ツレ「いかにこの屋の内へ案内申し候。

ワキ「誰にてわたり候ぞ。

ツレ「これは修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。

ワキ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、お宿は適ひ候まじ。

ツレ「さらば御歸りまでこれに待ち申さうずるにて候。

ワキ「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、この由を申さばやと思ひ候。

シテ「あゝ降つたる雪かな。いかに世にある人の面白う候

雪は鵝毛に似て雪似鵝毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。（白樂天）

陸奥　現奥羽地方の汎稱

らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を著て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もと見し雪にかはらねども、われは鶴氅を著て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥のぜふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。

あゝ降つたる雪かな

「あら思ひよらずや、この大雪に何とてこれに佇みて御入り候ぞ。

ツレ「さん候、修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候程に、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由

仰せ候程に、これまで參りて候。

シテ　「さてその修行者はいづくにわたり候ぞ。

ツレ　「あれに御入り候。

ワキ　「われらが事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘じて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。

シテ　「易き御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、お宿は適ひ候まじ。

ワキ　「いや〳〵、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。

シテ　「泊め申したくは候へども、われら夫婦さへ住みかねたる體にて候程に、なか〳〵お宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日の暮

山本の里　現群馬縣多野郡八幡村附近

れぬさきに一足も早く御出で候へ。

ワキ　「さてはしかとお貸しあるまじいにて候か。

シテ　「御痛はしくは存じ候へども、お宿は參らせがたう候。

ワキ　「あら、曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレ　「あさましや、われらかやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を參らさせ給ひ候へ。

シテ　「さやうに思し召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。いやこの大雪に遠くは御出で候まじ。某追つつきとめ申し候べし。

「なうなう、旅人、お宿参らせうなう。

「餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行き方を失ひ、一所に佇みて、袖なる雪をうち拂ひうち拂ひし給ふ氣色、〈古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮。かやうに詠みしは大和路や、〈三輪が崎なる佐野のわたり。

見苦しく候へど

駒とめての歌
新古今集七卷

三輪が崎
三輪山の麓
現奈良縣磯城郡の内

地〈これは東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へど一夜は泊り給へや。げに是も旅の宿、かりそめながら値遇の縁、一樹の蔭のやどりもこの世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、憂き寢ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん、夢より霜や結ぶらん。

一樹の蔭云々
或處ニ一村、宿ニ一樹下、汲ニ一河流、…
皆是先世結緣。
（說法明眼論）

シテ「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ参らせうずる物もなく候はいかに。

ツレ「折ふしこれに粟の飯の候程に、苦しからずは参らせられ候へ。

シテ「さらばその由申し候べし。

「いかに申し候、お宿をば参らせて候へども、何にても参らせうずるものもなく候。折ふしこれに粟の飯のある由申

盧生が見し云々
支那唐代の小說枕中記に見える寓話
少年盧生が邯鄲の都で道士呂翁に逢ひその枕を借りて榮華五十年の夢を見た話
邯鄲
現中華民國河北省邯鄲縣

し候。苦しからずは聞し召され候へ。

ワキ「それこそ日本一の事にて候、賜はり候へ。

シテ「なう、聞し召されうずると仰せ候。急いで參らせられ候へ。

ツレ「心得申し候。

シテ「總じてこの粟と申すものは、古へ世にありし時は、歌に詠み、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命をつぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一睡の夢の覺めしも、粟飯かしく程ぞかし。あはれやげにわれもうちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰むこともあるべきに、へなう御覽ぜよ、かほどまで地へ住みうかれたる古里の、松風寒き夜もすがら、寐られねば夢も見ず、何思出のあるべき。

シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて參らせ候べき。や、思ひ出したる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ「げに〳〵鉢の木の候よ。

シテ「さん候、某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや〳〵木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅・櫻・松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、これを火に焚きあて申さうずるにて候。

ワキ　「いや〳〵、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又おこと世に出で給はん時の御慰みにて候間、なか〳〵思ひもよらず候。

シテ　「いや、とてもこの身は埋木の、花咲く世にあはんこと、今この身にては逢ひがたし。

埋木の云々
埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける
（源頼政）

ツレ　〽唯いたづらなる鉢の木を、御身のために焚くならば、

シテ　「これぞ眞に難行の、法の薪と思し召せ。

ツレ　〽しかもこの程雪降りて、

シテ　「仙人に仕へし雪山の薪、

ツレ　〽かくこそあらめ。

シテ　〽われも身を

地　〽捨人のための鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪

雪山
釋迦が過去世に於て苦行したといふ印度の山

うち拂ひて見れば、面白や、いかにせん。

〽まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。

〽櫻を見れば、春ごとに、花少し遲ければ、この木や佗ぶると心を盡くし育てしに、今はわれのみ佗びて住む、家櫻切りくべてひざくらになすぞ悲しき。

いかにせん云々
いかにせん冬木も未だこらなくに深くも雪のなりまさるかな
（夫木抄）

窓の梅の云々
池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。
（和漢朗詠集）

見じといふ云々
山里の折りかけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらむ
（菅家後集）

今更薪になすべしとと

御垣守云々／
み垣守衛士の
焚く火の夜は
もえて晝は消
えつつ物をこ
そ思へ
（詞花集）

シテ　へさて松は、さしもげに、
地　へ枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、そのかひ今は嵐吹く、松はもとより常磐にて、薪となるは梅・櫻、切りくべて今ぞ御垣守、衛士の焚く火はおためなり、よく寄りてあたり給へや。
ワキ　「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。
シテ　「御出でによりわれらも火にあたりて候。
ワキ　「いかに申し候。主の御苗字をば何と申し候ぞ、承りたく候。
シテ　「いや、某は苗字もなき者にて候。
ワキ　「何と仰せ候とも、常人とは見え給はず候。自然の時の

爲にて候。何の苦しう候べき、御苗字を承り候べし。
シテ　「この上は何をか包み候べき。これこそ佐野の源左衛門尉常世がなれる果にて候。
ワキ　「それは何とてかやうのさんゞの體にはなり給ひて候ぞ。
シテ　「その事にて候。一族どもに横領せられて、かやうの身となりて候。
ワキ　「なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は候はぬぞ。
シテ　「運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、これに武具一領、長刀一えだ、又あれに馬をも一匹つないで持ちて候。これ

は、只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ、著到につき、〻さて合戰はじまらば、

地　〻敵大勢ありとても、敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄りあひ、打ちあひて死なんこの身の、このまゝならば徒らに、飢に疲れて死なん命、なんぼう無念の事ざうぞ。

ワキ　〻よしや身の、かくては果てじたゞ頼め、われ世の中にあらんほど、又こそ参り候はめ。暇申して出づるなり。

シテ　〻名残惜しの御事や。はじめはつゝむわが宿の、さも見苦しく候へど、暫しはとまり給へや。

たゞ頼め云々
ただ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは
（新古今集）

ワキ　〻とまる名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の、

シテ　〻空冴え、寒きこの暮に、

ツレ　〻いづくに宿を狩衣。

ワキ　〻今日ばかりとまり給へや。

シテ　〻なごりは宿にとまれども、暇申して、

ツレ　〻御出でか。

地　〻さらばよ、常世。

シテ　〻またお入り。

ツレ　〻自然鎌倉に御上りあらばお尋ねあれ。けうがる法師なり。かひ〳〵しくはなけれども、披露の縁になり申さん。

御沙汰捨てさせ給ふなと、いひ捨てて出で船の、ともに名残や惜しむらん、ともに名残や惜しむらん。（中入）

今日ばかり云々
翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞたづも鳴くなる
（伊勢物語）

東八箇國
關東八箇國
現關東地方一
圓の地

後ジテ　〻いかにあれなる旅人、「鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、夥しく上る、さぞあるらん。東八箇國の大名・小名、思ひ〳〵の鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀をのべたる太刀・刀、飼ひに飼うたる馬に乘り、乘替・中間きらびやかに、打連れ〳〵上るなかに、常世が常に變りたる馬・武具や打物の、物その物にあらざる氣色、〻さぞ笑ふらん、さりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる痩馬の、あら、道おそや。

地　〻急げども〳〵、弱きに弱き柳の絲の、

シテ　〻よれによれたる痩馬なれば、

地　〻打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乘り力なければ追ひかけたり。

後ワキ　「いかに誰かある。

ワキヅレ　「御前に候。

ワキ　「國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。

ワキヅレ　「さん候、悉く參りて候。

ワキ　「その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

錆びたる長刀を持ち

ワキヅレ　「畏まつて候。

「いかに誰かある。

狂言　「御前に候。

ワキヅレ　「君よりの御諚には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし、急いで尋ねて御前へ參れとの御事にて候。

狂言　「畏まつて候。

狂言　「いかに申し候。

シテ　「何事にて候ぞ。

狂言　「急いで御前へ御參り候へ。

シテ　「何と、某に御前へ參れと候や。

狂言　「なか〳〵の事。

シテ　「あら思ひよらずや。定めて人たがへにて候べし。

狂言　「いや〳〵、其方の事にて候、その子細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者を連れて參れとの御事にて候が、見申せば其方程見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候へ。

シテ　「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れと候や。

狂言　「なか〳〵の事。

シテ　「さては某が事にて候べし。畏まつたると御申し候へ。

狂言　「心得申し候。

シテ　「げに〳〵これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前に召し出され、頭を刎ねられんためな。よし〳〵、そ

れも力なし。いで〳〵御前に參らんと、〻大床さして見渡せば、

地〻今度の早打に、今度の早打に、上り集る兵、きら星の如く竝み居たり。さて御前には諸侍、その外數人竝み居つゝ、目をひき、指をさし、笑ひあへるその中に、

シテ〻横縫のちぎれたる

地〻古腹卷に錆長刀、やう〳〵に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前に畏まる。

ワキ「やあ、いかにあれなるは佐野の源左衞門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿借りし修行者よ、見忘れてあるか。いで、汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、

錆びたりともその長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參るべき由申しつる、詞の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづ〳〵今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が、詞の末、眞か僞か知らんためなり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰いたすべきところなり。まづ〳〵沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は、梅・櫻・松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇の庄、子孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、〻安堵に取添へ賜

梅田　現石川縣河北郡森本村梅田
櫻井　現富山縣下新川郡三日市町附近
松井田　現群馬縣碓氷郡松井田町

びければ、

シテ　〽常世はこれを賜はりて、

地　〽常世はこれを賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、これほどの御氣色、さぞ羨ましからん。

〽さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、古里へとてぞ歸りける。

シテ　〽その中に常世は、

地　〽その中に常世は、喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬にうち乘りて、上野（かみつけ）や、佐野の船橋取放れし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける、歸るぞ嬉しかりける。

（觀世流正本）

坪内逍遙
名は雄藏
英文學者　小說家　劇作家
早稻田大學教授
愛知縣の人
昭和十年歿
年七十七

長柄堤
現大阪市東淀川區に在る長柄川の堤

片桐市正且元
豐臣家の老臣
元和元年（二七五）歿
年六十二

木村長門守重成
豐臣秀頼の臣
元和元年歿
年二十一

茨木
現大阪府三島郡茨木町

一〇　長柄堤の訣別

坪内逍遙

場所　長柄堤

人物　片桐市正且元
　　木村長門守重成

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分かれゆく横雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消し行くいなのめの、長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黑く、有明凄き淀川水、逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。　片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、寅の刻に邸を

大阪城　現大阪市東區に在る

立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤に差懸る。

南山不落と云々　如二月之恒一、如二日之升一、如二南山之壽一、不レ騫不レ崩。（詩經）

故殿下　豐臣秀吉

從兵を先へ進ませし且元、後には何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やうやう晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分かち、ほの見え渡る賤が屋に、一筋騰る朝煙、くたかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬやいる方の、月すさまじき柳蔭、枯葉枝疎らにして風飄々、見る目も昏しをちかたに、おぼろおぼろと現るゝ、名におほ坂の四衢八街、悄然として淋しげに、一棟高く聳えしは、

片桐　「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下薨れ

加藤肥州　加藤肥後守清正　肥後國（熊本縣）熊本城主　慶長十六年（一二一一）歿

千姫君　德川秀忠の女　豐臣秀頼の妻　寛文六年（一三二六）歿

毘盧舍那佛　京都東山の方廣寺の大佛

御家云々　陰陽燮理。國家安康。四海施レ化。萬歳傳レ芳。君臣豐樂。子孫股昌。（方廣寺鐘銘）

前門の虎云々　禍去禍又至、曰二前門拒一レ虎、後門進二狼。（故事瓊林）

させたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵。取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存する者才略乏しく、阿附黨同して相鬩ぐ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、」

片桐　「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや、此の且元のすること爲すこと、鵐（いすか）の嘴と食ひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか『御家とこしなへに康かれ』と、祝ひし文字が本となり、降つて湧いたる難題は、たゞ前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かかる仕儀となつたること、御運の末といひながら、」

關東
德川氏

悠へず馬より飛んで下り、彼方に向かひ平伏なし、

片桐　「これ併しながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合はせ、不忠とも、言ひ甲斐なしとも思し召さん。それを思へば、某が、此の腸はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

片桐　「あゝ、我ながら不覺の至、我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし、心許なき事どもぢやなあ。」

御母公
淀君
秀頼の母
淺井氏
元和元年歿

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成、

木村　「市正殿に候な。」

片桐　「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におり立ち顏見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の淋しさを、長柄堤に留むらん。

木村　「最早豐臣の御社稷も、愈〻末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人・讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御

織田入道　織田信雄　法名常眞　信長の第二子　寛永七年（二二九〇）歿

大野　大野修理亮治長　秀頼の臣　元和元年歿

渡邊　渡邊内藏介糺　秀頼の臣　元和元年歿

嫌疑蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下の御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐに御表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立てて只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手を懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざ

且元と重成（歌舞伎舞臺面）

りし言ひ甲斐なさ。」

悔むを且元おし宥め、

片桐　「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至、大切なるはお家の後事、某退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。此の上は唯偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。」

木村　「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

九度山　現和歌山縣伊都郡九度山町
信州上田　現長野縣上田市
眞田安房守　眞田昌幸
慶長十六年（一二一七）歿
左衞門佐幸村　眞田幸村
元和元年歿
長曾我部盛親　土佐國（高知縣）の舊領主
元和元年歿
黑田家　筑前國（福岡縣）福岡城主
當主黑田長政
後藤又兵衞基次　元和元年歿
上　豐臣秀頼
右大臣　元和元年歿
年二十三

片桐「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將・勇卒にも事かかねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。」

木村「して其の智謀の將とは。」

片桐「今九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の樣を窺へるを、先年御身方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任かせられよ。其の他、關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みはつけ置きたり。上、御使を以て招か

紀州　紀伊國　現和歌山・三重兩縣の內
紀州川　紀の川　吉野川の下流　現和歌山縣の北部を流れ紀伊水道に注ぐ
浪華津　現大阪市の港

せられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配りなり。」

木村「してまた、籠城となつたる曉、敵を防がん手配りは。」

片桐「其の儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐り出させ、商業の爲といつはり、紀州川の川上より浪華津におし流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、猶支ふるに餘りあるべし。」

木村「それに加へて故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、猶若干の餘財あり。」

片桐「甲冑・兵具も乏しからず。」

木村「城は名に負ふ南山不落。」

速水
速水甲斐守守久
秀頼の老臣
元和元年歿
御宿
御宿越前守政友
越前國（福井縣）福井の城主松平忠直の舊臣
元和元年歿
和久
和久半左衞門宗是
秀頼の臣
佐々木
佐々木氏
宇多源氏の一族

片桐　「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」

木村　「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵をつくし、四方八面より攻め寄すとも、」

片桐　「中々三年四年が程に攻め落さんこと難かるべし。」

木村　「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、われ亦一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、先祖佐々木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰せに從ひ、此の事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ、市正どの。」

故太閤
秀吉
大御所
家康

片桐　「ほゝ、頼もしし、頼もしし。唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤はげまれよ。とはいひながら、往時に照らし、成り行く末を鑑みれば、」

木村　「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」

片桐　「上、御發明に渡らせらるれど、」

木村　「讒佞これを蔽ふがゆゑ、」

片桐　「地の利はあれども人の和なく、」

木村　「故太閤が御威武に、戰き震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、」

片桐　「天の時にや、大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。」

木村　「如何なれば、かくまでに御運かたぶく西天の、」

片桐　「有明の影薄れつゝ、」

木村　「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」

片桐　「新日東天に昇るといふ、」

木村　「世の成行の、」

二人　「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

二人　「さらば、さらば。」

と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が、此の世に殘す面影は、また見ぬ形とぞなりにける。

（逍遙選集）

北畠親房
吉野朝の忠臣
准三后
正平九年（一〇一四）歿
年六十二

前車の轍を云々
前車覆後車誡。
（漢書）

鳥羽院
鳥羽天皇
第七十四代

一一　人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生まれて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵まし、其の跡をあはれみて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして過分の望をいたすこと、自ら危むる端なれど、前車の轍を見ることは誠に有りがたき習なりけんかし。

中古までは、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符度々あり

き。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝ族多くなりしによりて、此の制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、言ふかひなき事になりにけり。

此のころのことわざには、一たび軍にかけあひ、或は家子郎從、節に死ぬる類もあれば、「我が功におきては日本國を賜へ」、もしは「半國を賜ひても足るべからず」など申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、又朝威のかろ〳〵しさも推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも君をないがしろにし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣・賊子といふ者は、其の始め心詞を

言語は云々　言行者君子之樞機。（易經）

堅き氷は云々　履霜堅氷至。（易經）

許由　支那堯代の高士

帝堯　陶唐氏　支那上代の天子

潁川　現中華民國河南・安徽兩省を流れて淮水に入る

巢父　支那堯代の高士

許由の友人

慎まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを末世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父は是を聞きて、此の水をだにきたながりて渡らず。其の人の五臟・六腑の變れるにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。猶行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の恨を殘すべきことをばなどか顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に分かたせ給はんことは、推しても量り奉るべし。もし、一國づつを望まば、六十六人にて皆塞がりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、

五百九十四人は悅ぶとも、千萬人の人は悅ばじ。況や、日本の半ばを志し、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを、謀反の始と云ふべきなり。昔の將門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀反を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけん。昔は人の正しくて、おのづから將門に見も懲り、聞きも懲り侍りけん。今は人々の心かくのみなりにたれば、此の世はよく衰へぬるにや。

漢の高祖の天下を取りしは蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは此の人なり」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひてすこしきな

將門　平將門　天慶三年（一六〇〇）歿
比叡山　現京都府と滋賀縣との界に在る
漢の高祖　劉邦　前漢の第一世
籌を云々　運籌策帷帳之中決勝於千里之外吾不如子房。（史記）
蕭何　高祖の宰相
張良　高祖の軍師
韓信　高祖の將軍
留　現中華民國江蘇省沛縣の內

る所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。

近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の比にや、奥の泰衡を追ひ討ちしに、自ら向かふことありしに、平重忠が先陣にて、其の功勝れたりければ、五十四郡の內いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少しき所を望みて、賜はりけるとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめんがためにや。賢かりけるをのこにこそ。又直實といひける者に一所を與へ給ふ下し文に、「日本第一の剛の者なり」と書きて給ひてけり。一とせ、彼の下し文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚だしきに、與へたる所のすくなさ、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事と口々に褒めあへりけり。いかに

頼朝　源頼朝
文治　後鳥羽天皇の御代の年號（一八四五―一八四九）
奥　現奥羽地方の汎稱
平重忠　畠山重忠　源頼朝の臣
長岡　現宮城縣遠田・志田・栗原三郡の內
直實　熊谷直實　源頼朝の臣

心得てほめけんといとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君を落し奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變りはてぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えしかど、中一年ばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下擧り集りて、都の中はえ〳〵しくこそ侍りけれ。

（神皇正統記）

中一年
建武元年
一九九四年
後醍醐天皇の
御代
神皇正統記
六卷
吉野朝時代に
成つた史書
國初から後村
上天皇に至る
御歷代の御事
蹟を記した書

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へたまふ。我が國のみ此の事あり、異朝には其の類なし。此の故に神國といふなり。

（神皇正統記）

天祖
國常立尊
神代七代の第
一神
日神
天照大神

一二　哲人の養成

安倍能成

安倍能成
哲學者
京城帝國大學
教授
松山市の人
明治十六年生

プラトンの理想國の目的とする所は道德の實現である。プラトンによれば、道德は眞の知識によつてのみ實現され得るものであり、眞の知識を明らかにするものは哲學である。隨つてかゝる哲學を身に體した哲人こそ、眞の道德實現者であつて、國家の統治者たるべき人物である。故に、哲人を得て一旦この國の統治權を委任したならば、その權限は絶對無限でなければならない。何となれば、この哲人こそは絶對的なる道德を代表し實現し得るもの、國家窮極の理想を遂行する者なるが故である。プラトンの國家の中心である、道德と眞知との具現者たる哲人が、この國家に於てかく重きを置かれ

プラトン
前427—前347
古代ギリシヤ
の大哲學者
アテネの人
理想國
プラトンの對
話篇「國家」
に於ける理想
國

たのは、當然のことといはねばならない。

然らば哲人の資格は如何なるものであるか。プラトンはいふ。哲人は先づその天分に於て豐富でなければならない。僞の無い人でなければならない。眞理を愛して已まぬ者でなければならない。感覺的欲求に淡泊な、物欲を解脫した、自由な人でなければならぬ。眞理の追求及びその實現に當つて生ずる諸〻の困難を克服するに足る、強い意志の所有者でなければならぬ。勇猛にして生死を顧みぬ者でなければならぬ。又、常に全體を思ひ、分離や不調和を惡む者

でなければならぬ。即ち簡單にいへば、將來哲人となる者は、その精神的素質に於て、哲學を好み、眞理に對する熱愛を有し、性格の強い、勤勉な人でなくてはならぬと。かくの如き素質若しくは資格を有する者を、將來の統治者として選擇し、國家の手に於てこれを教育し、養成するのである。

然らば哲人養成の方法はどうであるか。上の條件に適つた者が十歳になると、國家はこれを喧騷な都會から移して、靜かな田舍で教育する。この間に戰場に伴なひ、艱苦缺乏に堪へられるだけの鍛錬を與へる。又一方準備教育を授けて、正義・公正を好み、眞知を愛する情操を養ひ、道德的行爲に堪へ得る素質を習慣によつて養成するのである。又幼少の時代には、強制を避けて娛樂の中に萬事に習熟し得る方法を取る。

豫備學科として數學等はこの時代から教へるが、特に力を注ぐのは體育であつて、これはこの時代に於て、青年時代の專門教育の際には、體育を授ける必要のない程度にまで仕上げなければならない。それは、激烈な運動は學修の妨となるからである。

二十歳からは專ら學問研究に從事し、今まで箇々のものとして修得し來つた知識に統一を與へ、諸學科の關係を知らせる教育、卽ち哲學研究の時代にはひるのである。元來知識發達の順序から見ると、未だ眞の認識に達しない臆見の階段に於ては、感覺に映ずる現象に妨げられて、箇々の偶然的存在を實在と誤解するものであるからして、この哲學的學習によつて上の謬見を打破し、我々の認識の對象が常住不變なるもの

に存することを悟らしめようとする。かうして二十歳から三十歳までは、專ら哲學の本論たる辯證論に入る準備的研究をさせるのである。

元來知者を意味したソフィストの語は、當時に至つてはその本來の意味を失ひ、一種の侮蔑的意味を有する嘲笑の語として用ひられてゐたのである。それは當時のソフィスト等が、自ら知識の所有者を以て任じつゝ、しかも自己の反省に立脚した眞の知識を愛することを知らず、徒らに衆論に迎合してこれに學問的外衣を纏はしめ、群衆を利用し且誘惑して、哲學の本旨を外れた詭辯を弄し、延いては哲學の品位を下し、知識の價値を疑はしめる傾があつたからである。プラトンはこの似而非知者の卑陋を憤激してこれを攻撃すると共に、哲

ソフィスト　前五世紀頃ギリシヤに起り能辯術・修辭術その他市民生活に必要な教養を與へることを職業とした人々の稱

學の本論たる辯證論の研究に存する困難の多大なるを思ひ、半可通の徒や薄志弱行の徒の哲學を毒することを恐れて、斷じてこれらの徒の哲學の園生に入るを禁じ、以て哲學墮落の因を防がうとした。

二十歳から三十歳までに準備學を修得した者は、更に試驗を經て、こゝに五年の間專ら辯證論を修めさせられる。三十歳まで辯證論を修めることを許さないのは、深奥なこの研究が動もすれば誤用せられて、徒らに疑問を生み爭論を好む弊を生ずることを顧慮したからである。かくして五年間哲學研究の奥義に沈潛するのは、卽ち理想の高峯を仰ぐ所以であるが、これだけでは未だ哲人たる資格に於て缺ける所がある。哲學の學修者は更に一度、俯して世間の實情を親しく經驗せ

ねばならない。そこで三十五歳から五十歳までの十五年間、彼等は或は軍人となり、或は旅人となつて、世間學を修め、實生活の經驗を積むことを要する。かやうに五十歳に至るまで、或は學問に、或は實生活に、幾多の研究と幾多の經驗とを積み、樣々の試煉に堪へ得た賢人の中から、更に人物や性格を吟味して、やつとこれを統治者に選ぶのである。

けれども、かくして養成せられた哲人の中には、國家の首腦者たる位置に坐することを好まぬ者がないとは限らない。この場合、國家はこの人に對して統治者たることを強制する權利がある。哲人は獨善獨樂を許されない。併し一方から考へれば、自ら進んで統治者の位置に就かうとする者の少いことは、國家の慶事である。何故ならば、自ら求めて統治者た

らんとする者の中に眞の賢人は少く、統治者たるを肯んぜず、野に止らんとする者の中に却つて眞の賢者のあることは、昔も今も變りはないからである。隨つて、さういふ賢者を引出すことが、國家としては是非とも必要である。又哲人自身の側から考へても、單に自己の完成のみでは完全な哲人とはなり得ない。統治者として理想國建設の事業に參加し、道德的理想を實現して、始めて哲人の人格は完成せられるのである。されば賢者は、その義務の爲にも、その人格完成の爲にも、必ず統治者となるべきである。いはば「上求菩提」は「下化衆生」によつて始めて完成されるのである。

ケルン
1884―
ドイツの歷史家
南半球
ダンテの大詩篇「神曲」の世界構造に於ける地球の南半球
一つの島
煉獄の山島
アダム
舊約聖書に於ける人類の始祖

一三　淨火

ケルン

南半球の大洋に一つの島があつて、それは一つの高き山を冠としてゐる。風爽やかなるその巔に、思ふまゝなる天の近みに、幸福の園、地上の樂園がある。其處は嘗てアダムの置かれたところ、その樂しみを嘗めんがためにあらゆる人の心の餓ゑ渴くところである。

登り行く途は勞苦多く、山は特にその麓に於て峻しく、その門戸は容易に入り難い。さうして一度正しき途を發見すれば、人は更にこの山の上半部を圍繞せる七段の段丘を巡禮し廻らなければならぬ。これらの段丘の一つ〳〵がそれ〴〵に新なる勞苦を要求する。併し一人の人が、絕え間なく又常

に新しく燃やさるゝ意欲を以て嶺に到るまでの登攀を全くすれば、そのときこの山は歡喜を以て根柢から震動する。一つの歡呼の歌が響き渡る。さうして未だ嶺に登りつかぬ數千の巡禮は、一つの救はれた靈魂のために悅を共にし合ふのである。

テンダ

この神祕な島に接近するには、自恣の力を以てすることを許されない。嘗て探險家オデュッセウスが、神界の祕密を奪ひ取らんとして、大膽にこの山島に舵を向けたとき、嘗て見られたることなき國が彼の眼に入るや否や、いと高き手がその船を海底に沈めた。探險

オデュッセウス　ギリシヤの傳說中の人物　ホーマーの詩オヂッセイの主人物

欲に導かるゝ探險者が、縱令外面より如何に眞理に近づいても、彼は猶掟に逆らつて眞理に入ることをなし得ないであらう。眞理の內面は唯遜れる者にのみ開かれてゐる。さうしてオデュッセウスが持てるとは異なれる憧憬の心を要求する。

ダンテとヴィルジリオが地の底から攀ぢ登つて出て來たのは白々あけである。朝風と、海の匂と、星の空とが彼等を繞つてゐる。寂しき岸邊に於て、彼等は一人の父親らしき老人を認める。その老人は彼等に彼等の義務を指示する——彼等は地獄の煤を洗ひ去り、常に太陽の示しに隨つて山に登るべく身裝ひしなければならぬ。

二人は靜かな入江に降りて行く。

ダンテ　1265—1321　イタリヤの大詩人

ヴィルジリオ　前70—前19　ローマの詩人

地獄　「神曲」の世界構造に於ける地下の地獄界　悔悟することを知らない靈魂が永遠の呵責を受ける所

あけぼの早しのゝめに勝ちて、
これをその前より走らしめ、
かくて我遙かに海の慄へを認めぬ。
ヴィルジリオは雙手を草の露に浸してダンテの頰を洗ひ、
遜りの標(しるし)なる蘆を以てその腰を括る。この蘆は、折るに隨つて新に生ひ出るのである。
純白な翼を持てる光り輝く天使一人、海を越えて、近頃死せる靈魂を淨罪のさだめに導く。ダンテとヴィルジリオとは、遙かなる彼方よりこの奇蹟が海を越えて滑り近づくのを視る。靈魂の船は著陸するさうして新來の客は歡んで山の方へ急ぐ。
併しこの登山は、その始が最も困難であるといふ特殊性を

饗宴　四篇　抒情詩集　ダンテ著
煉獄　「神曲」の世界構造に於ける淨罪界　悔悟した靈魂が生前の罪を淨める所
カトー　前95—前46　ローマの政治家

持つてゐる。登口を發見するさへ、既に勞苦に價する。善良ながら薄弱な新來の靈魂は、途を問ひ尋ねる。併し間もなく、聖なる岸邊に來て未だ物馴れずたづきを知らねば、彼等はその熱心を喪失する。彼等の定まらぬ意志は自ら昏まして、道德的勞作にいそしむ代りに、朧な感傷の中に融けこんでしまふ。ダンテの青春の友、歌者カセルラの靈魂は、ダンテの「饗宴」の中なる憧の歌を唱つて、未だ定かならぬ世界觀を響かせる。地上を慕ふ鄕愁が、行く途を知らぬ靈魂をゆすぶる。
彼の崇敬すべき老翁、煉獄の守(まもり)カトーは、急ぎ近づいて、これらの小さき民を山の方へ、彼等の峻しき義務の方へ追ひやる。ダンテとヴィルジリオも亦、悔悟しつゝ音樂的な薄明り時から逃れ出る。

併し、美の奢は人を迷はせて道德的使命を忘れさせる。カトーの叱責の後、ダンテは、人間的省思の模範なる彼のヴィルジリオが、激しき悔悟の痛みのために、あらゆる威嚴を忘れて大急ぎに山へ驅けて行くのを見る。懺悔せる罪過は、不快といふよりも寧ろ快活に見える。

ああ尊き清き良心よ、
唯ささやかなる咎も汝を刺すこと如何に劇しき。

山峻嶮を極めて途なく、行人の心恐るゝとき、ダンテは懈怠の靈魂に逢つて、却つてその渴望の力をかき立てる。これらの靈魂は、時に當つてその淨福のために勞苦しなかつたために、今や忍耐して、恩寵が彼等のために煉獄の山を開いてくれるときを待つてゐなければならぬのである。彼等は佇立し、

門 聖ペテロの門 七大罪の淨めの行はれる七段の段丘への入口

休息し、逍遙しつゝ、山の低部の傾斜に幾團の群れをなしてゐる。彼等は心憂ひつゝ、彼等の位置の無目標なことを感ずる。併し此處では、牧歌的無活動の中にも、猶將來に於ける登攀の期待が交つてゐる。

遂に旅人は狹き岩間の徑路を見出して身を登攀に委ねる。さうして疲勞が既にダンテを脅し始めたとき、折よく大怠惰(おほなまけ)者(もの)ベラックワの滑稽な姿が彼に警告を與へる。ベラックワは岩陰に晝寢をしてゐるのである。

兄弟よ、登り行くも我に何せん、
門の前に居る天の使は、
煉らるゝ者の群れに入るを我に許さねば。

ベラックワはその性癖を除き去ることを強ひられぬ故を

以て、下の方を樂に感ずる。さうしてこれらの門前に待つ輩の、惡意のあるにもあらぬ凡常な性情の中には、氣輕に他を助けんとする人の好さと、隣人の報償を豫期する人頼みなる打算との混淆がある、人間らしい利己主義がある。「我がヨハンナに、我がために祈るやう言傳てよ。」「我は汝の願を充たさん、されど汝は汝の祈を以て我を助けよ。」煉獄前界を貫ぬいて響くものは、いつもこれである。これらの巡禮は、猶自分のことを思ひ、人頼みと注文とに充ちてゐる。唯彼等の請ひ求むるものは、最早物質的福利ではなくて、その靈魂の淨福のための祈願である。

かくの如く善良にして同時に薄弱な衝動に附屬するものは、又自然のまゝの好奇心である。ダンテの肉體の投げる影によつて、彼が未だ生者であることがわかつたとき、亡魂等はいたく驚いて樣々の質問をかける。さうしてダンテは、そのために心散りて、將に行旅の力を失はんとする。ヴィルジリオはこれを戒める。

煉獄前界
聖ペテロの門に至るまでの山の下腹部の地帶

汝如何なれば心ひかれて
行くこと遲きや。
彼等の私語汝と何の係りあらん。
我に從へ、この民をその言ふに任かせよ、
嵐荒べどもその頂ゆるぐことなき
強き櫓の如くにして立て。

精神の凝集は煉獄前界の最も重い義務である。——人格の

淨化と沈潛との豫備條件である。

ヴィルジリオとダンテは、煉獄前界に於て夜を待つてゐる王侯のまとゐに近づく。彼等は、樣々の花が寶石のやうに輝いて、千々の匂さへこれに加つてゐる夕の溪間の美しき草原に坐つてゐるのである。ダンテが山の麓に送つた長い日も傾いて行く。

テールキス・アンテ　一日の最後の禮拜に歌ふ祈の歌

鎖された門の前に、夕影の中にゐて、疲れた人々は待つ。此處にゐて彼等の歌ふはテールキス・アンテである。

光の消えぬさきに、
主よ、我等汝に請ひ求む、
我等の守とならせ給へ、
優しき心もて守護し給へ。

遠く離れてあれ、夢よ、
又夜の魔どもよ。
日が沈んで旅する人の力弛むとき、誘惑の蛇は溪を過ぎつて這ひ寄つて來る。併し憧るゝ一つの魂を音頭取としたこの夕の祈につれて、守護の天使が、夕闇を貫ぬいて天降つて來る。天には三つの輝く星が現れる。それらのものは信仰と希望と愛とを意味して、新しい日を豫約するのである。

これがダンテの登山の第一日である。憧憬と豫感と準備とがその內容である。

（阿部次郎譯神曲入門）

阿部次郎
思想家　評論家
東北帝國大學教授
山形縣の人
明治十六年生

一四　人間ゲーテ

茅野　蕭々

茅野蕭々
名は儀太郎
獨文學者　詩人　歌人
文學博士
慶應義塾大學教授
長野縣の人
明治十六年生

ゲーテ
1749—1832
ドイツの文豪

プロメトイス
ギリシヤ神話の神人

ゲーテ作同名戯曲の主人物

ファウスト
Faust
ドイツの傳說的魔術師

ゲーテ作同名劇詩の主人物

ゲーテの偉大は今更言說を要しない。彼がひとり獨逸文學史上の第一人者であるばかりではなく、また世界文學上容易にその比を見出し得ない天才であることは既に久しく人人の知つてゐる所である。彼の精神の宇宙的包容力は、彼をして人生・自然の一切の感情・思想、あらゆる氣分・情調に徹しさせ、プロメトイス・ファウストの樣な巨人的な奮鬪から、下つては種々の戯言・諧謔詩に至るまで、到る處としてその眞を穿たないものはなく、その詩材の廣汎に亙ると共に、その用語の自由・淸新の趣致に富み、韻律の變化、生動の氣に溢れてゐる妙は、殆ど言語に絕するといつてもよい。諸外國諸藝術の長所を

ハムレット
シエークスピヤ作の悲劇

咀嚼して新に試みた種々の形式と獨自な形式とは、淸楚・優艶・華麗・深玄・輕妙等、必要に應じて多端を極めてゐる。彼が「ファウスト」その他に於て企てた心理的戯曲樣式は、「ハムレット」を除いては、世界文學中殆どその類を見なかつたものであり、「親和力」その他の作が、典型的な出來事の經過を純一に、又深刻に描出する一新樣式を創設したものである事も、改めていふには及ばないであらう。彼が文學のあらゆる領域に於て、またあらゆる問題に於て、我々近代人に與へたものは實に枚擧に遑ないといふべきである。就中、彼が撓まぬ一生の熱意と努

ゲーテ

力とを以て、自己及び文學の爲に、人性と事象との自然を獲得した功績は、實に他にその比を見ないといつても過褒ではないであらう。更に彼が、一面自然科學者として、事實の正確な研究認識を事としながら、研究によつて世界を無味乾燥なものとしないで、却つて事實が詩的であることを鮮明にしたことは、彼が我々に與へる最も重大な意義であると思はれる。

しかしながら、ゲーテに於て最も偉大なものは、何といつてもその人間である。ヴィーランドが既に正しく道破してゐるやうに、彼こそは實に「人間的な人間のなかの最も偉大な人間」である。彼はあらゆる人間的要素を同一な偉大さで一身に集めてゐた。この點に於て彼は全く人間の典型と呼ばれるに値する。實際彼より鋭い悟性、彼より強い精力、彼より深

ヴィーランド
1733—1813
ドイツの詩人・小說家・戲曲家

い感性、彼より活潑な想像力を持つ人間はあつたかも知れない。しかしこれ等精靈の力を彼のやうに合一して偉大だつた人間は、確に未だ一人もなかつたと斷言してもよいであらう。彼の文學の偉大も、實にこの偉大な人間ゲーテの反映に外ならない。世界文學の至寶といはれる劇詩「ファウスト」も、この生きた人間ゲーテの生活の結晶であるが故に、一層その意義を高めてゐることは確である。

惟ふに、ゲーテの一生を貫ぬく生活原理の一つは、自己を生き盡くすことでなくてはならない。天賦の才能はいふまでもない。境遇の與ふるものも、學習によつて獲得したものも、悉く自ら生き盡くさないでは止まない。それが彼の生活原理である。老後の彼は、頻りに諦念の叡智を強調してゐるけ

れども、それは決して單なる諦念ではなくて、常に活動と集中とを伴なつたものであり、いはば眞に生き盡くさんが爲の手段方法に過ぎないのである。それ故、ゲーテは決して一所に停滯してはゐない。佛蘭西革命・獨立戰爭等、政治上の事件に對しては比較的退嬰的であつた彼も、精神界・藝術界の運動に關しては常に敏感であつて、時代精神の進歩と共に動いて、或はこれを指導し、或はこれを受容したことは、彼の態度を通覽すれば明瞭であつて、いかにゲーテが進歩的であつたかを理解することが出來る。一時期に於て卓越を誇り得る人は、その數が少いとはしない。しかし、生涯の全時期を通じて、不斷に進歩展開することゲーテの如きは、眞に稀に見るものといはなくてはならない。

（ゲョエテ研究）

佛蘭西革命　1789—1799
獨立戰爭　アメリカの獨立戰爭　1775—1785

一五　言靈

井上毅

井上毅
政治家
文部大臣
樞密顧問官
子爵
熊本縣の人
明治二十八年
歿　年五十三

古言を吟味することは一の歴史學なり。何れの國にても、太古の歴史は事矇昧に屬し、當時の風氣・意想は筆の跡に遺りたる記實のみにては知りがたきことぞ多かるに、古き語は古への人の風氣・意想をさながらに後の世に傳へて、數千歳の後より數千歳の古へに溯りて當時の樣を想像せしむるものなり。されば古言を吟味することは歴史學の一として數ふるの價値を有するなり。抑「言靈の幸はふ國」と稱ふる我が國の古言には、樣々尊きことのある中に、余は一の上なくめでたき語を得たり。

土地・人民の二要素を備へたる國を支配する所作を稱へた

詩經　毛詩　二十卷　漢詩集　支那殷代から春秋時代に至る詩を輯錄したもの　五經の一

中庸　一卷　經書　もと禮記中の一篇　四書の一

る語は國々に於て種々なるが、支那にては「國を有つ」といへり。「有つ」とは我が物にし、我が領分にして手に入るゝ意にして、俗に「一つの屋敷を手に入れた」或は「一つの山を我がものにした」といふと同じ意なり。詩經に「奄有天下」とあり。「奄有す」とは掩ひかぶせて手に入るゝ意にして、天下は廣大なるものなるを以て、かく稱へしものとおぼゆ。これ國土・國民を物質同樣に一の私產と見たるものにして、中庸には「富有天下」ともいへり。一人にして天下を私有すとは穩ならぬ言葉なれば、彼の聖人はこの語を修飾するために「有天下而不與」といへれど、「不與」といふことと「有つ」といふことは、一句中に意義の矛盾ありともいふべし。その後、政治思想稍進みては「治國」「經國」などいふ語を用ゐるにいたりしかど、「治む」といひ、「經す」といふも、亂れたる絲の筋々を揃ふる意にして、猶專ら物質上の意想に成立ちたる語に外ならず。人民に對しても亦「民を御す」といひ、「民を牧す」といへり。「御す」とは馬を使ひ、「牧す」とは羊を畜ふことにして、人民を馬羊に喩へたる太古未開時代のおほらかなり思想をそのまゝ傳へたるものなり。

ヨーロッパに於ては、國土に關しては、國をオキュパイ卽ち「占領す」といへり。「占領す」といふ語はやがて「奪ふ」意味をも含めり。又人民に對しては、ガヴァンとて船の舵を執る意味の語を用ゐたり。支那にて「御す」といひ、「牧す」といひしと同じく、人民を一つの物質に見なしたるより轉用したるものなり。

かくして支那もヨーロッパも、古への人の國土・人民に對せし作用言はいと疎かなる語を用ゐたるものにして、國土を繩

建御雷神　武甕槌神　官幣大社鹿島神宮の祭神
大國主神　大己貴命　出雲を中心に國土を經營された神　官幣大社出雲大社の祭神

張りして己の領分にするを目的とし、手綱をつけ、舵を取りて乘り治むるといふあしらひをもて稱へたるものと覺えたり。こは古への人は、今の世の人の如く政治學の精密なる思想無かりし故にぞあるべき。

さて我が國にては、古來この國土・國民に對する支配を何と稱へたるかを見るに、古事記に、天照大御神が建御雷神を下したまひて大國主神に問はしめられし條に、「汝がうしはける葦原の中國は、我が御子の知らさむ國と言依さし賜へり」とあり。卽ち「うしはく」といひ、「知らす」といふ二つの語が、太古に於ける人主の土地・人民に對する働を言ひ表したるものなりしなり。さて大國主神には、「汝がうしはける」と宣ひ、御子のためには、「知らす」と宣ひたるには、この二つの語の間に意味の違あるによ

本居宣長　國學者　伊勢國（三重縣）の人　享和元年（一四六一）歿　年七十二

神日本磐余彦天皇　神武天皇

ることとぞ覺ゆる。「うしはく」といふ語は、本居宣長の解釋に隨へば、卽ち「領す」といふことにして、ヨーロッパ人の「オキュパイ」と稱へ、支那人の「有」「奄有」と稱へたると意義全く同じ。こは一の土豪の所爲にして、土地・人民を我が產としたる大國主神の御業を示したるものなるべし。正統の皇孫として照らし臨み給ふ大御業は「うしはく」にはあらずして、「知らす」と稱へ給ひたり。その後、神日本磐余彦天皇を「始馭天下之天皇」と稱へ奉り、又世々の大御詔にも、「大八洲國知ろしめす天皇」と稱へ奉るをば公文式となされたり。されば、かしこくも皇祖傳來の法は、國を「知らす」といふ語に存すといふも誣ひたりとせず。國を「知り」、國を「知らす」といへるは、各國に比較すべき語なし。今國を「知る」、國を「知らす」といふ語を、支那の人西洋の人に意譯

を用ゐずして聞かせなば、その意味を了解するに困しむべし。そは彼等には、國を「知る」、國を「知らす」といふ如き意想存せざればなり。「知る」といふは、今日普通に用ゐる語の如く、「心にて物を知る」の意にして、内なる心と外なる物との關係を表し、さて内なる心は外なる物に臨みて鏡の物を照らすごとく知り明らむる意なり。古書に、「知らす」といふ語に「御」の字を當てたるは、當時の歴史を編む人、適當なる漢字なきに苦しみ、是を借り用ゐたるものにして、固より言語の意味には適はぬ文字なり。

かくいへば、人は難じていはん、太古の人にさばかり高尚なる思想あるべきにあらず、今の人の考を以て附會したるならんと。事實は然らず。「うしはく」と「知らす」の二つの語を相對せしめて用ゐ、しかもその二つの語の主格にかくの如きけぢめあるを見れば、爭ふことのあるべきやは。若し、其のけぢめなかりせば、上の一條の文章をば何と解し侍るべき。

故に、支那・ヨーロッパにては、一人の豪傑起り、多くの土地を占領し、一の政府を立てて支配したる征服の結果といふを以て國家の釋義となすべきも、我が國の天日嗣の大御業の源は、皇祖の御心の鏡もて天が下の民草をしろ知めすといふ事實より成立ちたるものなり。かゝれば、我が國の國家成立の原理は、君民の約束にあらずして一の君德なり。國家の始は君德に基づくといふ一句は、日本國家學の開卷第一に說くべき定論にこそあるなれ。かくて我が肇國の原理は「國知らす」といふにあり、而してその原理よりして種々のめでたき結果を生じたるなり。

（梧陰存稿）

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稲田大學教授
米澤市の人
明治七年生

古事記　三卷　匽初から推古天皇迄の史書
日本書紀　三十卷　國初から持統天皇迄の史書
延喜式　五十卷
古代法典
延長五年（一五八七）撰進
日本武尊　小碓命
景行天皇の皇子
景行天皇四十三年（七七三）薨　御年三十

一六　大和民族の固有性

五十嵐力

奈良朝以前のおもなる文學は、古事記・日本書紀の中にある百八十餘首の歌と、延喜式の中にある祝詞とであります。

祝詞は神に祈る詞であるが、其の中で最も文學的價値のあるのは、大祓詞と祈年祭とでありませう。祝詞を見ると、我が國民が罪・穢を忌んだ事、清きを愛した事、直きを愛した事、神を敬つた事、平和を愛した事が解ります。祈年祭は豐年を神に祈る詞で、學者の中には、これは日本人の貴い理想を現したものので、世界第一の文章であるとまで云つて居る人もあります。

古事記・日本書紀の歌の例としては、日本武尊の御臨終の御歌にかういふのがあります。

平群の山
現奈良縣生駒郡生駒村附近の山地
能褒野
現三重縣鈴鹿郡に在つた野
大和
大和國
現奈良縣

命の　全けむ人は　たたみこも　平群（へぐり）の山の
隱白（くまかし）檮が葉を　髻華（うず）に插せ　その子

これは、尊が伊勢の能褒野（のぼぬ）で薨りたまふ時に、遙かに故郷の大和を思ひやつて歌はれたので、「思國歌（くにしぬびうた）」と呼ばれてゐるものであります。旅路に惱み、死に臨んで故郷を偲ぶは人情の自然でありますが、邪神の毒氣に中り、恐しい苦悶を重ねて薨りたまふ間際に、「遙かなる故郷人に寄語（ことよ）す、命の全き人は、平群の熊樫をかざし、陽氣に遊んで、人生を樂しめかし」と歌はれた、此の樂天的・積極的・向上的・光明的な御氣象は、眞に有難いものではありますまいか。

日本武尊はいろ〳〵な點に於て、大和民族の固有性を備へられた御方でありました。熱すれば矢も楯もたまらぬ御氣

川上梟帥
熊襲族の長

象でありますが、君父の命にはおとなしく從ふといふ優しい所がありました。東西の兇賊を手もなく平げる武勇があつて、それで姿はといふと、女裝すれば川上梟帥を欺く優美さがありました。人を信じて、群る夷の間に直往して火攻めに逢はれると、劒で其の火を薙ぎ返して夷を鏖にされる。お薨れになる間際に、健かな人達は遊べよ樂しめよと勸められる。此のいろ〳〵な積極的性質の面白く調和した趣、實に愉快な御性格ではありますまいか。

日本武尊は世に在した時は、自ら「吾が心、恆は虛よりも翔り行かむと念ひつるを、云々」といはれましたが、薨れまして後は白鳥となつて、天に翔つて行かれたと申すことであります。熊樫に白鳥、私は此の二つが大和民族の堅實なる性質と淸潔

須佐之男命
素戔嗚尊
天照大神の御弟

優美を愛する性質、足許を固める著實性と高きに憧れる向上心とを表す標章として實に相應はしいものと思ひ、而してこれが日本武尊といふ上代の代表的英雄に繫がつて居る事を非常に面白く思ひます。私は日本の國民性が凝り固まつて日本武尊となつたのではないかとさへ思ひます。

次に、古事記の趣を示す例として、須佐之男命が高天の原に上られた時の一節を引いて見ませう。

山川悉に動み、國土皆震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、我がなせの命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ、我が國を奪はむと欲ほすにこそと詔りたまひて、卽ち御髮を解き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御髮にも、左右の御手にも、各八尺勾瓊の五百津のみすまるの珠を纏

き持たして、そびらには千入の靭を負ひ、五百入の靭を附け、またいつの竹鞆を取佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹶ゑ散かして、いつの男建び踏み建びて、待ち問ひたまはく、何故上り來ませるととひたまひき。

大意は、「須佐之男命は山川・國土を震り動かして、高天の原に上つて來られた。大御神は聞し召し驚かせられて、弟の命が恐しい權幕で上つて來たのは、きつと善意からではあるまい、察するに我が國を奪はうとの下心であらうと仰せられて、早速凜々しい男裝に改めさせられ、髮を解いて角髮に結び、左右の御角髮にも、御鬘にも、左右の御手にも、玲瓏・燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入の靭を前後につけ、左手の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振り立てて、堅い庭に向股まで踏みぬかるばかり力足を踏ん張り、土くれをば沫雪の如く蹴ゑ散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、威丈高に立ちはだかつて、命の見えるのを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた」といふことであります。

此の敍述のうちには、今土から掘り出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが微妙に調和して居るではありませんか。天照大御神の氣高い勇ましい御姿が、雄壯・剛健なる大文字となつて躍動して居るではありませんか。

我等の祖先の面影の古文學に現れた趣は、此のやうなものでありました。

（作文三十三講）

一七　彫刻と自然

ロダン

何處で私は彫刻を會得したか。森の中で、樹木を見ながら。路の上で、雲の構造を觀察しながら。工場の中で、モデルを研究しながら。到る處でである。自然から學んだものを、私は自分の制作の中に置かうと努力した。

自然は決してやり損はない。自然はいつでも傑作を作る。これこそ我々の大きな、唯一の、何につけてもの學校だ。

人はよく天氣が惡いといふ。それに就いて我々は何を知つてゐるか。

ロダン
1840—1917
フランスの彫刻家

繰返すが、判斷をするなら全體に就いてせねばならぬ。會得するまで待つ忍耐を持ちなさい。そして先づ讃歎しなさい。一切が讃歎す可きものである。我々を傷つけるものでさへも。自然に對する反逆は力の無駄づかひである。無知の結果である。そして苦惱に終る。

あゝ！「惡い」天氣とは、暗い天氣のことだらう。空が、傾いて落ちかゝる危險な海のやうなことだらう。——實に美しい！

藝術に於て、人は何にも創造しない！自分自身の氣質に從つて自然を通譯する。それだけだ！

我々は物が別別であるかのやうに教へられる。そして人間はそれを別々のまゝにして置く。それを結集するに必要な辛抱づよい努力を引受ける人間は稀だ。

バルザック（ロダン作）

善いデッサンの祕訣は、其の一致の感の中にある。物は「此」が「彼」の中に入り込み、互に貫ぬき合ひ、また捌き合ふ。――これが生命だ。

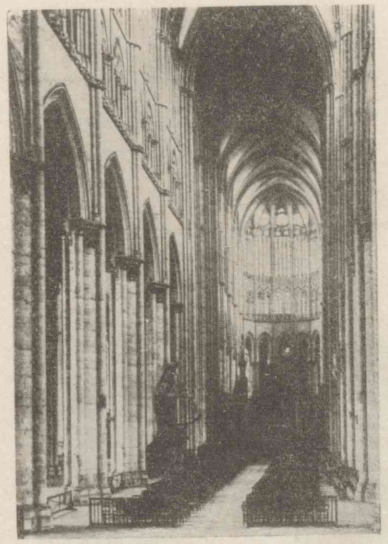
デッサンに於て、形律こそ統一だといふことを忘れるな。これは學習によつて得られるもので、理想的神來などによるものでない。一言でいへば彫刻は辛抱だ。

――何處から始める。

――始は無い。諸君の行き當つた所からおやりなさい。最初諸君の眼にとまつた所に立停りなさい。そして勉強なさい！少しづつ統一がついて來る。方法は興味につれて生まれて來よう。最初見た時は、眼が色々の要素を解剖的に分

解するが、やがてそれは互に投合して來て全體を形づくる。

こつ〳〵と一人でする勉強は、人に先づ辛抱を教へる。辛抱は精力を教へる。そして精力は永久の若さを與へる。永久の若さは、專念と熱中とで出來る。其處から、人は生活を見又會得することが出來る。この微妙な生活を、我々は自分達の息づまつた精神の人工で不自然にする。自然や藝術の傑作に圍繞されてゐながら、會得しないのだ。あせりながら、何もしないのだ。立派なものの傍らにゐながら、盲目なのだ。



アミアンの寺本の圓柱

高村光太郎
詩人
彫刻家
東京市の人
明治十六年生

私は、人間の、規則正しい反覆によつて絶えず自己を增大する努力を愛する。この繰返しの運動が卽ち戰の紀律である。又本寺の圓柱である。圓柱は連續することにより、協力することによつて、その優美を十倍にする。

諸君は、今日の人々が意味する「獨創（オリジナル）」とは何かを知つてゐるか。それは「類（タイプ）から離（レイ）れる事（エ）」である。昔の人はこんな野蠻な思ひつきを生むのを許さなかつた。

彫刻に獨創はいらない。生命がいる。

（高村光太郎譯、ロダンの言葉）

一八　茶の宗匠

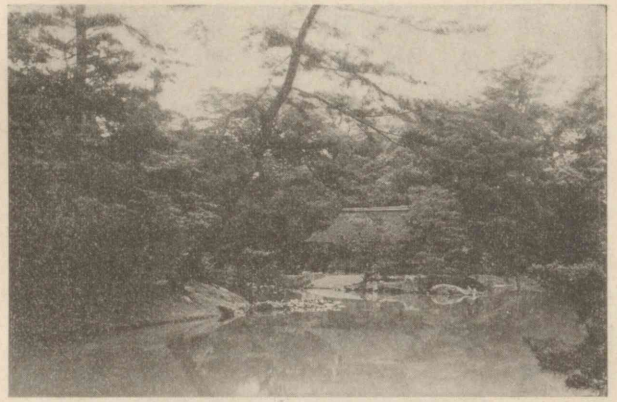
岡倉覺三
號は天心
明治畫壇の先
覺者
東京美術學校
長
横濱市の人
大正二年歿
年五十二

岡倉覺三

茶の宗匠達は、眞の藝術鑑賞は、たゞ藝術を生きた感化力たらしめる人々にのみ可能であると考へた。故に彼等は茶室に行はれてゐる高い教養の規準を以て、彼等の日常生活をも律しようとした。いかなる場合にも心の落著きが保たれなければならない、談話は周圍と調和するやうに運ばれなくてはならない。衣服の仕立や色合も、體の坐りも歩きぶりも、すべては藝術的人格の表現たらしめ得る。これ等は決して輕く看過してはならない事柄である。といふのは、人は己自身を美なるものとして始めて美に近づく資格を得るのであるから。かくして宗匠達は、單なる藝術家以上のもの――藝術

小堀遠州
名は政一
茶人　工藝家
伏見奉行
正保四年（二三〇七）歿
年六十九
桂離宮
現京都市右京區に在る
名古屋城
現名古屋市西區に在る
二條城
現京都市上京區に在る
今は二條離宮
孤蓬庵
現上京區に在る臨濟宗大德寺派の本山大德寺の塔頭

そのものとならうと努めた。



桂離宮庭園（松琴亭）

茶の宗匠達の藝術に對する貢獻は實に多方面に亙つてゐた。彼等は古典的な建築及び室内裝飾を全く革新して、新しい樣式を確立した。その影響は、室町末期以後に於ては、あらゆる宮殿・寺院の建築にまで及んだのであつた。多能な小堀遠州は、桂離宮、名古屋及び二條の城、孤蓬庵等に、彼が天才の著しい實例を遺してゐる。我が國の有名な庭園はいづれも茶人によつて設計せられた

遠州の七窯
志戸呂燒・上野燒・朝日燒・赤膚燒・膳所燒・高取燒・古曾部燒

ものである。我が國の陶器は、若し彼等が彼等の靈感を貸さなかつたら、恐らくその優良な品質を贏ち得るには至らなかつたであらう。茶器製作のためには、一方製陶業者の方でも有らん限りの工夫の智慧を絞つたのである。遠州の七窯は日本陶器研究者のよく知つてゐるところである。我が國の織物の中には、その色や模樣の考案者たる宗匠の名を負つてゐるものが多い。實際、藝術の如何なる部門にも、茶の宗匠がその天才の跡を遺してゐないところはない。繪畫・漆器に關し

舟橋蒔繪硯箱（光悅作）

本阿彌光悅
刀劍鑑定家
畫家　工藝家
茶人
寛永十四年（一二九七）歿
年八十一

光甫
本阿彌光甫
畫家　工藝家
茶人
天和二年（一三四二）歿
年八十二

光琳
尾形光琳
畫家　工藝家
享保元年（一三七六）歿
年五十九

乾山
尾形乾山
光琳の弟
畫家　工藝家
寛保三年（一四〇三）歿
年八十一

て彼等のなした偉大な貢獻について云々するのは殆ど贅言であらう。繪畫の大きな流派の一つはその源を、茶人であると同時に塗師・陶器師としても有名な本阿彌光悅に發してゐる。彼の作品に比すれば、その孫の光甫や甥の子光琳・乾山の傑作も殆ど光を失ふのである。この流派は一般に光琳派と稱せられるが、その總べては茶の精神の表現である。この派の描く太い線には、自然そのものの生氣が感得されるやうに思はれる。

茶の宗匠が藝術の分野に及した影響が偉大であつたといへ、これを彼等が實生活の上に及した影響に比すれば、殆どいふに足りないものである。上流社會の作法に於てのみならず、さゝやかな家事の按排に於ても亦、我々は茶の宗匠の存

在を感ずるのである。給仕の仕方はもとより、よき日本料理の多くは彼等の工夫になつたものである。彼等は落ちついた色の衣服を著よと教へた。また花に對する正しい精神を教へてくれた。彼等は、人間生來の簡素の愛を強調し、謙讓の美を示してくれた。實際、彼等の教によつて、茶は民衆の生活の中にはいつたのである。

この人生といふ、愚かしいいざこざの波の騷がしい海上に於て、自己の生活をあるべきやうに規定してゆく道を知らない人々は、幸福らしく、滿足らしく裝はうと徒らにあがきつゝ、絶えず悲慘な狀態にゐる。我々は心の安定を保たうとして却つて動搖を招き、水平線上に雲の浮かぶ毎に暴風雨の前兆として心を冷す。さはれ、永遠に向かつて逆卷きゆく波濤の

列子
列禦寇
支那戰國時代の道家
風そのものに列子御風、冷然善也。
（莊子）

利休
千利休
名は宗易
茶人
天正十九年（一二五一）歿年七十一

うねりの中にこそ、喜が、また美が存する。何故に波濤そのものと一體にならないのか、また何故に列子の如く風そのものに御さないのか。

美と共に生きて來た人のみが美しく死ぬことが出來る。大宗匠達の臨終は、その生涯と同樣に、いみじき教養を示すものであつた。彼等は常に宇宙の大いなる運行との調和を求め、そのためには何時でも死を辭さない覺悟をもつてゐた。利休の「最後の茶會」の如きは、彼等のこの悲壯な覺悟を示すものとして、永遠に輝くであらう。

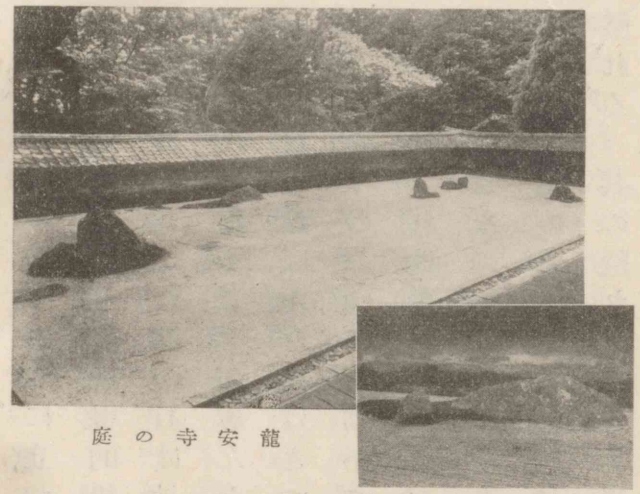
（茶の本）

一九　龍安寺の庭

荻原井泉水
名は藤吉
俳人
東京市の人
明治十七年生
龍安寺
臨濟宗妙心寺派の名刹
京都市右京區花園に在る
相阿彌
相阿彌眞相
畫家　茶人
大永五年（一一八五）歿

「方丈」といふ扁額を打つた一堂に添うて低く見切を圍うた土塀のうち、長方形に砂を敷きつめて、十箇ばかりの石を置きならべただけの庭である。此の庭は相阿彌の意匠に成ると傳へ、虎兒渡（とらのこわたし）と名づけられてゐる。

私はしばらく其の石にじつと眺めほれてゐた。此の石のどの一つを見ても、さして奇拔な形をもつてゐるのではない、だが決して平凡ではない。其の一つを一つとして見てゐても確に味がある。けれども、これをかう集めて見る所に、始めて其の石の一つ〳〵が本當に生きて感じられる。――此の石の一つ〳〵が孤ではないのだ。しかも單なる群でもない。



龍安寺の庭

砂は白い。方丈の障子も白い。いや、障子は白いといふよりも稍曇つた空の色だ。砂も亦其の空をうつす曇つた水の色なのだ。二方をめぐらす土塀の土の色、一方にある壁の色、これも亦しつとりと落ちついて、此の庭を繪としての、立派な額縁になつてゐる。塀の外には楓の木が枝を重ねてゐるが、まだ赤くも染まらず、しかも蟬の聲はもう絶えて、今は秋の最中の閑寂の焦點をなしてゐる。

此の庭の美しさはどこから見るべきものであらうかと、私は方丈の縁のあちこちに立つて見た。一歩々々視點を移すに隨つて、石と石との繪畫的組合はせが變化する。實に多趣多樣である。これ等の石は見方に依つて動くのである。隨つてこれは「動く」ことの趣だと云へる。だが、試みに此の石の一つを取り除けたならば、きつと隙が出來るだらう。してみると、此の中の一つでも動かすことは出來ない。其の意味から云へば、これは「動かない」所を捉へた意匠だとも云へる。

石は、大きなのの側に小さなのが一つづつ添ふやうに置いてある。或視點から見る時には、其の一つが大きな石の後に隱れる。其の隱れたのを見得るやうな視點に立つと、別の所にある一つが隱されるやうになる。で、此の庭にある石を悉く一眸に收めることは出來ない、さういふ工夫を凝らして造つたものだとも云ふ。一つづつが隱れてゆくと云ふ事は、新しい一つづつが現れてくると云ふ事だ。石をかくれんばうさせて遊ばせてあるのだ。

私は相阿彌が此の庭を造る時の氣持を想像してみた。彼は先づ、好い石を得る爲に非常な苦心をしたことだらう。さて選ばれた石を如何に置くべきかに、彼は更に工夫を重ねたに相違ない。或は盆の上に同數の小石を置いて、いろ〳〵に置き換へて見ては工夫したかも知れない。砂の上に置くべき石の位置は無數にある。其の中から、斯うだと彼が最後に見出した所の配列は、唯一無二のものだつたのである。石はそれ〴〵の地點についた。其のあるべき所に、――生え拔い

たものの如く安定して――そこに始めて生かされたのである。さうだ、確にこれ等の石は生きてゐる、一つ〳〵が生きてゐるばかりでなく、全體として生きてゐる。

私は又、相阿彌が造園の材料として何故に石のみを選んだのだらうかと考へてみた。それは石の美をはつきりと現さうといふ心持からでもあらう。しかし、それと共に彼の氣持をはつきりと現さうとしたからでもあるに相違ない。木や草といふものは、いはばそれ自體が生きて感情をもつてゐる。隨つて、作者自身の心持と木や草の感情とが入りまじり易い。純粹に自分の氣持を現す素材としては、木や草は好いものではない。又、木や草をあしらつた庭は、とかく天然の摸寫になり易い。天然の摸寫ではなしに、純粹に自分の氣持を表現し

表現派　現世紀初頭以來ドイツに起つた藝術の一派

ようとした爲に、彼は特に石ばかりを用ひたのであらう。ここには近代の表現派の意圖と相通ずるものがある。

此の庭に雨の降る日はどんなにいゝであらう。春の雨でもいゝ。秋の雨でもいゝ。春の雨ならば、先づ砂をしと〳〵と濡すであらう。そして石は濡れたといふほどでなく、潤ひの色が出たといふ位にいき〳〵してくるであらう。秋の雨ならば、先づ石がずつぷりと濡れるであらう、潮が落ちて磯の石が濡れたまゝ現れたといふ風に。そして、砂は夕凪の海のやうに美しく輝くであらう。春の花とか、秋の紅葉とか、さういふ景物を用ひずして、四季の空氣共のものを直ちに感じさせようとした、石ばかりの庭は微妙である。

（京洛小品）

二〇　手首の問題

吉村冬彦

吉村冬彦
本名寺田寅彦
物理學者
隨筆家
理學博士
東京帝國大學
教授
帝國學士院會
員
東京市の人
昭和十年歿
年五十八

ヴァイオリンやセロを彈いて好い音を出すのは中々むづかしいものである。同じ樂器を同じ弓で彈くのに、下手と上手とではまるで別の樂器のやうな音が出る。下手な者は無理に弓の毛を絃に押しつけ、こすりつけて、さうして強ひていやな音を搾り出して居るやうに見えるが、上手な玄人になると、實にふはりと輕くあてがつた弓を通じて、恰も樂器の中から易々と美しい音の流れを抽き出して居るかのやうに見える。これは我々素人の眼には、實際一種の魔術としか思はれない。玄人の談によると、強いフォルテを出すのにも、弓の壓力や速度だけでは決してうまく出るものではないさうであ

フォルテ
強く
音樂の術語

る。例へば、イザイの持つて居たヴァイオリンは、ブリッヂが低くて絃が指板にすれ〳〵になつて居た。他人が少し強く彈かうとすると絃が指板にぶつかつて困つたが、イザイはこれで、易々と、驚くべき強大な好い音を出したさうである。此の魔術の大事な種は、全くあの弓を導く右手の手首にあるらしい。手首の關節が完全に柔らかく自由な屈撓性を備へて居て、極めて微妙な外力の變化に對しても、鋭敏に、且規則正しく彈性的に反應するといふことが必要條件であるらしい。勿論、これに關しては未だ十分に科學的な研究は出來て居ないから、餘り正確な事は云はれないであらうが、併し、所謂ボーイングの祕密の最も主要な點が此處にあるだけは、疑のないことのやうである。

イザイ
1858—1929
ベルギーの作
曲家・演奏家
ヴァイオリン
の名手
ブリッヂ
絃柱
ボーイング
運弓法

物理學的に考へて見ると、一度始つた絃の振動を、それ自身の進行のまゝに進行させ、さうして其のエネルギーの逸散を補ふに足るだけの供給を、絃と弓の毛との摩擦に打勝つ仕事によつて注ぎこんで行くのであるが、其の際、もし用弓に少しでも無理があると、折角規則正しく進行して居る振動を、一時邪魔したり、又急に途中から別な餘計な振動を紛れこませたりして、其の爲に音が汚くなつてしまふのである。さういふことのないやうにする爲には、弓が極めて敏感に絃の振動狀態に反應して、丁度絃の要求するエネルギーを、必要にして且有效な位相に於て供給しなければならない。此の微妙な反應機巧は、絃と弓とが一つの有機的な全系統を形成して居て、さうして外部から我が儘な無理押しの加らないことが緊要

である。併し、弓の毛にも多少のむらがあるのみならず、弓の根元に近い方と先端に近い方とでは色々の關係がちがふから、さういふ變化にも、臨機に適當に順應して、自由な絃の運動を助長し、一樣に平滑に好い音を出す爲には、唯機械的に一定壓力・一定速度で直線的に弓を動かすだけではいけないであらう。それには、もつとデリケートな調節器官が入用であつて、其の大切な役目を務めるのが弓を持つた演奏者の手首であるらしい。普通には、絃が獨立した振動體であるやうなことになつて居るが、あれも嚴密に云へば、絃も樂器全體も弓も演奏者の手も、凡て引つくるめた一つの系統として考へる方が本當だと思はれる。さうして、音の振動數は主として絃で決定するが、音色を決定する因子中の最も主要なものは、手首

の運動を司どる筋肉の微妙な調節にあるやうに思はれるのである。

此のやうに、樂器の部分としての手首、或は寧ろ手首の屈曲を支配する筋肉は、少しも強直しない、全く弛緩した狀態になつて居て、しかも如何なる微細な力の變化に對しても彈性的に反應するのでなければならないのである。

此の手首の自由の問題は、絃樂器のボーイングに限らず、其の他の色々な技術の場合にも起つて來るから面白い。

撞球をするのには、キュー尻の方を持つ手の手首を強直しないやうに自由に開放することが必要條件である。手首が強直凝固の狀態になつて居ては、キューの眞直なピストン的運動が困難であるのみならず、種々の撞き方に必要なキュー

キュー撞棒

の速度加速度の時間的經過を自由に調節することも不可能であるやうに見える。特に輕快な引き球などの出來ると出來ないは、主として此の手首の自由さに係るやうに思はれるのである。

中學時代に少しばかり居合拔の稽古をさせられたことがある。刀身の拔き差しにも手首の運動が肝要な役目を務める。又眞劍を上段から打ち下す時に、びゆーつと音がするやうでなければならない。それには勿論刃が眞直になることも必要であるが、其の上に手首が自由な狀態にあることが必要條件であるやうに思はれる。擊劍でも、竹刀の打ち込まれる電光石火の運動に、此の同じ手首が肝心な役目を務めるであらうといふことも想像されるであらう。

こんな話を、偶然、或軍人にしたら、それは面白いことであると云つて、其の時話してくれたところに據ると、乘馬の稽古をするときに、手綱をかいくる手首の自由な屈撓性を養ふ爲に、手首をぐる〳〵廻轉させるだけの動作を繰返してやらされるさうである。どうも世の中の事が、何でも彼でも、みんな手首の問題になつて來るやうな氣がするのであつた。

手首の問題についての自分の經驗は先づこれだけであるが、よく考へてみると、此の手首の問題を想ひ出させるやうな、譬喩的な手首の問題がいろ〳〵あることに氣がつく。

科學の研究に從事するものが、或研究題目を捉へて其の研究に取りかゝる。何かしら或見當をつけて、かうすればかうなるだらうと思つて實驗を始める。其の場合に、若し研究者

の自我が其の心眼の明を曇らせるやうなことがあると、とんでもない失敗をする虞がある。さうでない結果をさうだと見誤つたり、或は期待した點は其の通りであつても、それだけでなく外に色々もつと重大な事實が眼前に歷然と出現して居ても、それには全く盲目であつて、其の爲に意外な誤つた結論に陷ると云ふ危險が往々ある。それで科學者は眼前に現れる現象に對して、言はば赤子の如き無私無我の心をもつて居なければならない。止水明鏡の如くに、あらゆるものの姿を其の有りの儘に寫すことが出來なければならない。武藝の達人は夜半の途上で後から突然切りかけられても、ひらりと身をかはすことが出來る。それと同じやうな心の態度を保つことが出來なくては、瞬時の間に現れて消えるやうな機

微の現象を發見することは不可能である。それには、心に私がなく、言はば「心の手首」が自由に、柔らかく、彈性的であることが必要なのではあるまいか。

誰であつたか、或學者が次のやうなことを云つて居た。「自然の研究者は自然を捻ぢ伏せようとしてはいけない。自然をして自然の赴く所に赴かしめるやうに導けばよい。さうして自然自身をして自然を研究させ、自然の神祕を物語らせればよい」と。我々は心を空虛にして、其の自然の物語に耳を傾け、忠實なる記錄を作ればよいのであらう。これを自分の現在の場合の言葉に飜譯すると、「研究の手首を柔らかくして、實驗の弓で自然の絃線の自然の妙音を引き出せばよい」とも云はれるであらう。

中學時代には、よく「おれは何々主義だ」と云つて力瘤を入れることがはやつた。南瓜を食はぬ主義や、いがぐり頭で通す主義や、無帽主義などと云ふのは愛嬌もあるが、併し他人の迷惑を考慮に入れないやうな主義もあつた。例へば風呂に入らぬ主義などがそれである。年をとつて後迄も、中學時代に仕入れたさういふ種類の主義に義理を立てて、忠實に守りつづけて來た人も稀にはあつた。これらは、珍しい手首の堅い人であらう。手首の柔らかいといふことは、無節操でもなければ卑屈な盲從でもない。自と他とが一つの有機體に結合することによつて其の結合に可能な最大の效率を上げ、それによつて、同時に自他二つながらの個性を發揚することでなければならない。

採点欄
71

科考答案　昭和　年　月　日施行

第四學年第九學級　番號 十　氏名 井上友一

（廣島一中用紙）

一　美しい樂しい而も超獨的な世界

(1) 赤や青等繪具を持て繪を畫く事としなくても美しい風景の色合ひといふものが自然と目

(2) 分の心の中にしみ込んで來る又その中に遊ぶことが出來る

(3) 有難いせ界であるといふ事と充分に知り得る

(4) 心といふ二種のカメラに道徳のすたれ人心の乱れた此の世界を非常に清くにごりのないしかも

(5) よろこびの満ちたうらうらかなせ界であるといふ様におさめ入れる事が出來たならば詩をよま

ず繪もかゝなくてよいのである

(6) 詩といふものはすこしもつくれない人でもかしその詩を充分理解し詩の世界に遊ぶことの出來

る人には詩の一句も出來ず繪かもかけなくとも繪のも理想精神をよく

理解し自分の心を遊ばす事の出來る人は少し

(7) 此の何時の時代においてもかはる事のない俗慾のない美に満ちた別世界をつくりたす事が

出來るといふ点に於て又私的な利益獲得或は欲望だとかいふ雑念をすつかり

捨て

る事が出來る点において

(8) 非常に富豪を持てる人

(9) 此の文明の神のからかはいがられてゐる富豪な人

(10) 毎日毎日不安にとざされた日まばかりをすごしてゐる富豪な人

二　毎日毎日不安にとざされた日まばかりをすごしてゐる中にやうやくにして自分は白河の関に到着して

はじめて今自分の奥州の旅をしてゐるといふ氣持がたしかに定つた　そこでどうにかして都の人々

自分は今白河の関に到着したといふことを知らすために都への便を求めたけれでもだめであつた

ゆけて此の白河の関所は日本中で有名な三つの関所の一つであつて風流人達は心にとめ

てゐた「秋風」とよんだ歌と歌にうたはれ　やはり名の青葉のは趣深くあつた

そのあたり一面に卯の花の咲きみちてあり　その上加ふるに菖の花が白く咲いてゐて　あたり一面眞

白であつて雪にもまがるやうな心持がする

(8) 苟くも能因に敬意を表して此の関所を訪ねたために卯の花と歌にさしてそれと訪着のかはりとして此の関所をと思ふことよ

自分で詩や繪は出來なくても

俗慾にくいこの世界から判定得

世界より

ということが出來たら

俗人的煩ひをひきぬいた詩的畫的有難い

世界の繪見

ということが出來たら

ということが出來たらよりのである

三　(11) どうしたら　よく文句があせてはまる立派な句が出來やうかと言つて苦心をしてやつと

つくりあげた句はなにも役に立たない　しかしながらそうかと言つて男樂しないでおいかと

といふとそうではない　苦心をつみ經ては苦心することなしには名句を得る事にな

らないとは思樂しないでも立派な句が出來る事にはならない

(12) 二十才とすぎたころ學問をしやうと思つて都に上つて行つた　その十一才に父に

死に別れ　その上家の職業までは失なしてしまつた時であつたので母の御指圖

にしたがつて　お醫者になる學問を勉強しやうとして　京にのぼつたのである

科考査答案　昭和　年　月　日施行

第四學年第九學級　番號 十　氏名 井上友一

採点欄 71

-13　11　-5

明晰さを缺ぐ

一、(1) 美しい而も超獨的な世界 (利害損得等の俗念のない)

(2) 赤や青等繪具を持って繪を書く事をしなくても美しい風景の色合ひといふものが自然と自分の心の中にしみ込んで來る又その中に遊ぶことが出來る。

(3) 有難い世界であるといふ事を充分に知りぬきながら

(4) 心といふ一種のカメラに道徳のすたれ人心の乱れた此の世界を非常く清くにごりのないしかもよろこびの満ちたうららかな世界であるといふ様におさめ入れる事が出来たならば詩をよまず繪もかゝなくてよいのである

(5) 詩といふものはすこしもつくれなくても しかしその詩を充分理解し詩の世界に遊ぶことの出来る人には詩の一句も出来ず 繪が少しもかけなくとも その繪のもつ理想精神をよく理解しそれに自分の心を遊ばす事の出来る人は 繪かかけなくとも

(6) 此の何時の時代においてもかはる事のない 俗念のない美に満ちた別世界をつくりだす事が出来るといふ点に於て 又私的な利害損得或は欲望だとかいふ雜念をすっかり抜き捨てる事が出来る点において

(7) 非常に(深山)宮貴な事を持ってゐる人

(4) 此の大明の神のからかはいがられてゐる宮貴な人

二 毎日毎日不安にとざされた日ばかりをすごしてゐる中にやうやくにして白河の関に到着してはじめて今自分の奥州の旅をしてゐるといふ氣持がたしかに定った。そこでどうにかして都の人々自分は今白河の関に到着したといふことを知らすために都への便を求めたけれども駄目であったわけて此の白河の関所は日本中で有名な三つの関所の一つであって風流人達は心にとめてゐた「秋風を」とよんだあの歌を頭にうかべ紅葉を心にうけべた やはり青葉のは趣深くあったそのあたり一面に卯の花の咲きみちてゐおり その上加ふるに茨の花か白く咲いてゐて あたり一面眞白であって雪の中にもまさるやうな心持がする

昔人が能因に敬意を表して此の関所を晴着を着て此の関所をとほったといふが自分は晴着を持たないために卯の花を頭にさしてそれを晴着のかはりとして此の関所をと應ることよ。

一、(8) 自分で詩や繪は出来なくても住みにくい此の世界から利害損得等の俗人的な煩ひをひきぬいた詩的畫的有難い世界に遊ぶことが出来るあらゆる俗界の羈絆よりも幸福である というのが東洋の詩境の特質である。

三、(1) どうしたらよく立派な句が出来やうかと言って苦心に苦心をしてやっとつくりあげた句はなにも役に立たない しかしながらさうかと言って思案しないでよいかといふとさうではない。苦心に苦心をつみ経にはなることなしに名句を得る様にならなくては 思案しないでも立派な句が出来る様にはならない

(2) 二十才をすぎたころ學問をしようと思って京都に上って行った その十一才の時父に死に別れ その上家の職業まで失くしてしまった時であったので 母の御指圖にしたがって お醫者になる學問を勉強しようとして京にのぼったのである

孔子や釋迦や耶蘇も、色々なちがつた言葉で手首を柔らかく保つことを說いて居るやうな氣がする。

序でながら、搖れる電車やバスの中で立つて居るときの心得は、膝の關節も足首の關節も柔らかく自由にして、さうして心もち踵を浮かせて蹠の前半に體重をもたせると云ふやうな姿勢をとることださうである。大地震の時に倒れないやうに歩くのも同じ要領だと云ふことである。これも言はば脚の場合に於ける「手首の問題」とでも云はれるであらうか。

（寺田寅彦全集）

國語　卷八　終

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月四日發行
昭和十二年十二月十三日訂正再版印刷
昭和十二年十二月十八日訂正再版發行

國語　全十卷
定價各冊金五拾五錢

（覆木製本）2/1

編輯者　岩波編輯部
代表者　岩波茂雄

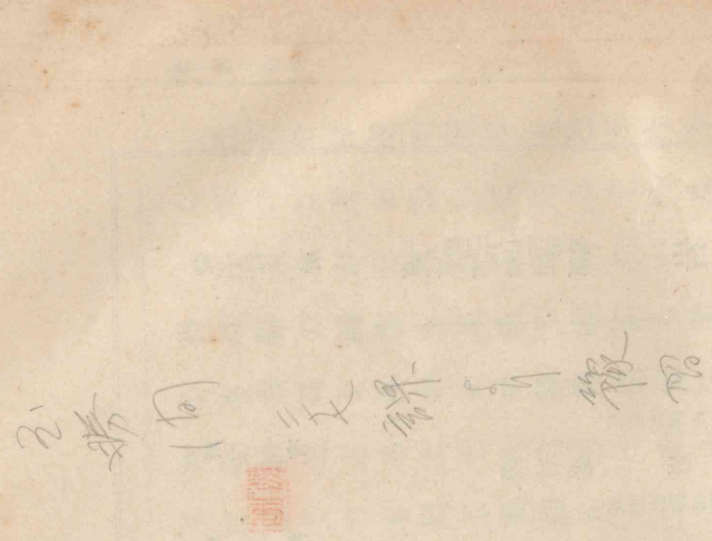
發行者　東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

版權所有

發行所　東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
岩波書店
電話九段（一八七）一八九・一八八番
振替口座東京二六二四〇番



の關は、詩歌の道にたづさはれる人々の必ず心に留めた所で秋風の音を想像し、紅葉の美しさを心に畫いて今青葉を見ると矢張り美しい。

③ちはやぶる神のむかし大山つみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。

答　大昔、大山祇の神のなさつたしわざであらうか、それとも造化の神のなさつたしごとであらうか、どんな人が、筆をふるひ、或は詞をつくして此の自然の細工を形容するであらうか。それは誰もできないであらう

④偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。

國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

答　さても忠義の家來をよりぬいてこの城にこもり、功名手がらをしたのも叢となつてしまつた。杜甫の春望の詩に「國は破れても山河は依然として元のまゝである。城は春になれば草木が青々と芽を出す。」といふ句があるが、實にこゝもその通りであると思ひ感慨に堪へず笠を打ち敷いて、時間の移るも知らず涙を落しました。

⑤闇中に模索して雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて雨の霽るゝを待つ。

答　くら闇の中に手さぐりして行くやうであるが、雨の景色も亦奇拔でよいとするならば、雨上りの晴れた景色も亦頼もしく思はれて、粗末な漁夫の苫葺きの家には入つて雨の晴れるのを待つことにした。

二、讀方、解釋

①別墅　ベツショ　（別莊）
②彌生　ヤヨヒ　（陰曆三月の稱）
③行脚　アンギヤ　（徒歩、遊歷。又僧が食を乞ひながら諸國を巡歷して佛道を修業する意）
④路次　ロジ　（道すがら）
⑤官然　エウゼン　（うらむさま）
⑥榮翻　エイエウ　（榮華ぜいたくに暮すこと）
⑦頽廢　タイハイ　（くづれすたれること）
⑧開基　カイキ　（寺の創立）

七陽炎

松尾芭蕉

解題

本課は元祿の俳聖松尾芭蕉の代表的の詠句十五を掲げたものである。芭蕉は前課に於ても解説した通り、談林派の句を排して自ら蕉風を開き、元祿俳壇の祖となり、中心となつた人である。そして其の句は自然に沒入して閑寂を尊び眞の風流境を味はつたものである。

【枯芝やゝかげろふの一二寸】

語句釈

【枯芝】冬になつて枯れた芝。

【かげろふ】春のうららかな日に野原などにちら〳〵立ち昇る氣。

〔句意〕冬の枯芝もやがて春を迎へる樣になつて、陽炎がやつと一二寸ばかりちら〳〵と立ちのぼる樣になつた。もう間もなく春が來るであらう。

【雲雀より上にやすらふ峠かな】

語句釈

【やすらふ】休息。

〔句意〕雲雀は常に空高く飛んでさへづる鳥であるが、其の雲雀よりも更に高い峠の上に自分は今休んでゐる。

【ほろほろと山吹散るか瀧の音】

〔句意〕物凄い勢ひで瀧の水が落ちてゐる。其の瀧の音にふれて山吹の花がはら〳〵と散るのであらうか。

【辛崎の松は花より朧にて】

語句釈

【辛崎】滋賀縣滋賀郡下阪本村の東端、琵琶湖の西岸にある。辛崎の松は八景の一つで有名である。

【朧】ぼんやりかすんでゐること。

〔句意〕雨にけぶつてゐる辛崎の松の景色は、ぼんやりとかすんでゐる櫻の花よりも更におぼろにかすんで又なく美しい景色である。繪の樣に美しい句である。

【くたびれて宿かるころや藤の花】

〔句意〕一日中歩きまはつてすつかり疲れて宿に就きたいと思ふ頃、ふと其の宿の軒先きかどこかに藤の花の美しく咲いてゐるのを見つけたといふのである。夕方の藤の美しさがよく表はれてゐる。

【六月や峯に雲おく嵐山】

【嵐山】京都にある櫻の名所で風景のよい所。

〔句意〕春四月の頃であれば滿山一面に花の雲におほはれる嵐山であるけれども、今は六月で花もなく、其の頂きには花の雲でなく本ものの雲をいただいてゐる嵐山であるわい。

【清瀧や波に散り込む青松葉】

〔句意〕清瀧の水があまりきれいなので、其の波の中に青い松の葉が散つてまき込まれたが松葉の青と水の色とが同じ色なので見分けがつかない。

【ほととぎす大竹藪をもる月夜】

〔句意〕大きな竹の林をもれる月の光は何となく物凄い氣持を與へるが、折しも月光を横切つて鳴き過ぎる時鳥の聲は更に凄愴な感じがする。

【ひやひやと壁をふまへて晝寢かな】

【ふまへて】寄りかゝつての意。

〔句意〕つめたい壁に寄りかかつてひやゝとした氣持のよさについ晝寢をしてしまつたといふのである。

【菊の香や奈良には古き佛達】

〔句意〕上品な菊の香りと奈良にある高雅な古佛とを思ひ合はせて詠んだ句である。「菊の香」と言つても奈良に特に菊の花が多くあるといふのではない。

【稲づまや海の面をひらめかす】

【稲づま】いなびかり。電光。

〔句意〕稲づまがぱつと光ると、まつ暗な海の表面が一瞬光りかゞやく、何といふ美しさであらう。雄大な然かも瞬間の美が巧みに詠まれてゐる。

【月はやし梢は雨を持ちながら】

〔句意〕冬の空に突き立つてゐる枯木の梢に今にも雨が降りさうな樣子を見せながらも、月は其の動きが非常に早いといふので冬空荒涼たる景色を詠んだ句である。

【寒菊や粉糠のかかる臼の端】

【寒菊】寒中に咲く丈の低い菊である。

〔句意〕米をつく冬の日向の臼のそばに寒菊の一鉢が置いてあつて、それに粉糠が散りかかるといふのである。

【初しぐれ猿も小蓑をほしげなり】

【初しぐれ】初めて降る時雨。「時雨」は秋冬の頃少し降つては直ぐに止む雨。

〔句意〕初しぐれがざつと降つて來た。木々を鳴き渡つてゐる猿は如何にも寒さうで猿までが小さい蓑をほしさうな樣子に見える。

【埋み火や壁には客の影ぼふし】

【埋み火】灰の中にうづめてある火。

〔句意〕冬の夜の埋火が何となく寒々しい感じがする。其の上壁には客人の影法師がうつつてゐて、それが一層寒い感じを起させるといふのである。